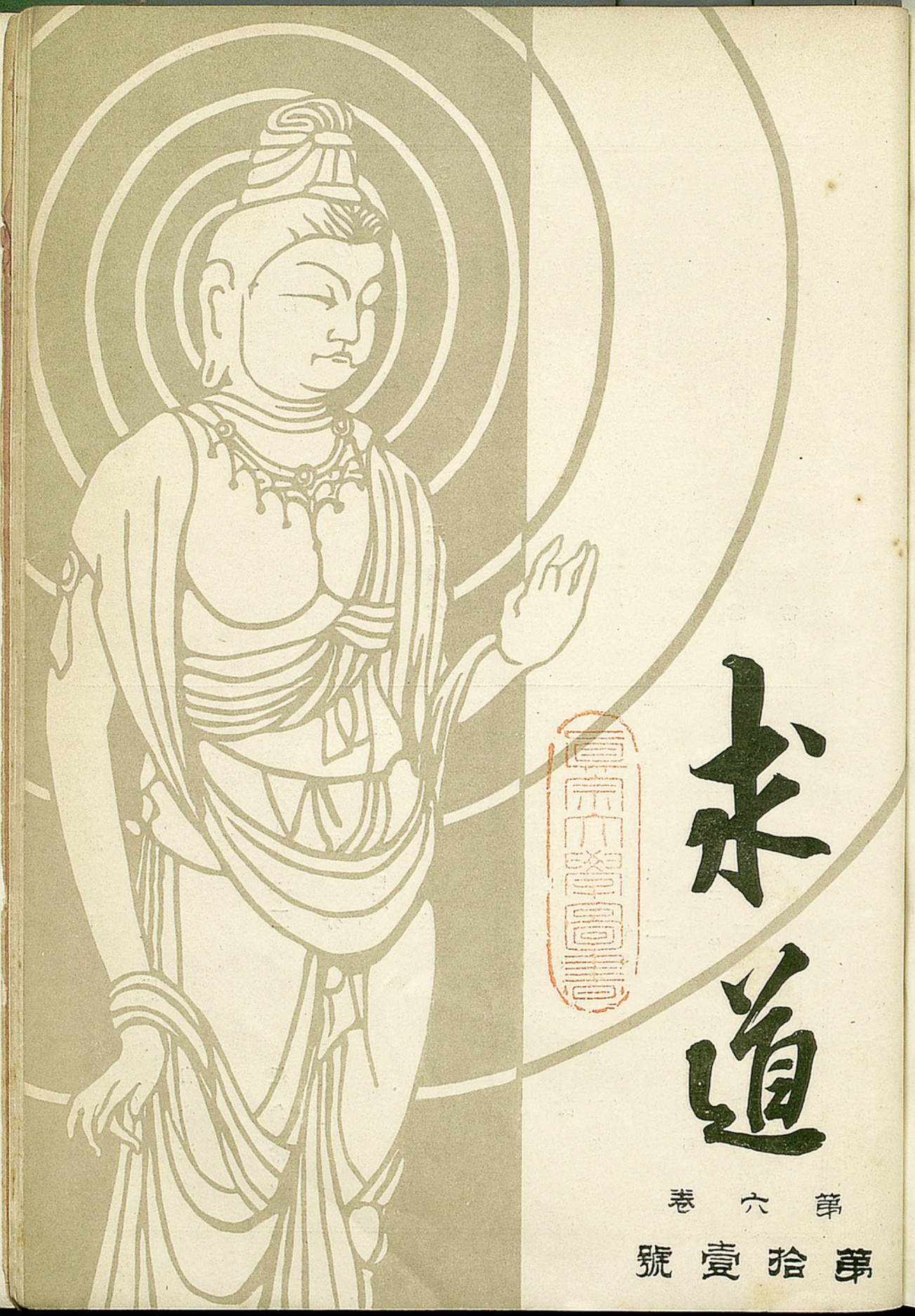

求道

第六卷

第壹拾號

求道第六卷第拾一號目次

求道

◎眞人生　自督

◎歳晩の感謝　講話

◎信疑の得失　聖傳　近角常觀

◎ヂヤータカ釋尊傳
第卅六　埋れる金
第卅七　恐しき地獄

雜錄

◎近時思想界と信仰問題　近角常觀

◎徹底せざる人生觀　近角常觀

告白

◎是非善惡の分らぬ汝を愍む本願也　岩永法電

講義

◎歎異鈔――第十二章　近角常觀

紹介

◎愚禿親鸞◎花つみ日記

時報

◎臘月思海

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午后二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午后七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町説教所》

求道　第六卷　第十一號

眞人生

近時世人言論に若くば實行に、人生問題に向て視線を集むるに至れり、一面に於ては確に眞面目なる氣風を示すものにして賀すべしと雖、其解決を求むる方角が恰も正反對に趨りつゝあるは頗る遺憾とすべき也、何故に眞面目といふ、是從來主觀的に假想を以て成立したる信仰の人生に力なきことを感じ來りて、今や正に其眠より醒めて力ある眞人生を求むるに至れば也、然れども其解決を求むるや、諺に所謂羹に懲りて膾を吹らんとするが如く、信仰問題に於て解決を求むるは全く不可能と速斷し、或は物質的に、或は經營的に、或は世間的に、或は研究的に其解決を求むるの傾向頻々として皆然らざるはなし、是れ從來の冥想的傾向か一變して實行的傾向に趨りたるのみ、即定善的が散善的になりたるのみ、今日の傾向が遂に亦何等の効力なきことを悟ること亦久しからざるべし、既に人生未解決、無解決の叫を傳ふるに至れり、然らば今日の傾向は眞人生に達する經過として免るべからざる道程とするも、未だ世人が眞信仰を以て眞人生を解決するの道あることを悟らず、洵に哀むべき也、必ず久しからずして物質的、經營的、世間的、研究的方法に躓くこと火を覩るよりも明らかなりと雖、其の躓くを待ちて自覺を促さんとするは忍びざるの甚しき也、加之躓きて而して猶自覺せざるもの滔々として皆是也、悲しむべきの至りならずや、吾人は茲に眞信仰の眞人生を實現し得べきことを警告して、四海の同朋と共に大悲の眞光明に浴せんと欲する所也。

人生は吾人が何物を以ても解決すべからざる也、智識を以て、財産を以て、肉體を以て、終養を以て、何れの行を以ても人生最終の解決を得べからざる也、而して此の如き何物を以て解決すべからざることを憐愍したまひて、貧窮困乏、愚鈍下智、少聞少見、破戒無戒の者を攝せんが爲に大慈大悲を起したまふ如來の御心即是選擇本願にあらずや、人生に於ける眞光明は此如來の恩寵を感受するに在り、此如來の眞心を信知するに在り、是實に本願一實の大道也、絶對無碍の眞心也、此如來ましましてこそ人生初めて意義あり、秩序あり、此如來に安住し奉りてこそ人生初めて光明あり、幸福あり、若し

此如來の恩寵を蒙らずんば吾人富貴あるも何かにせん、權利あるも如何にせん、身體健全なるも永久の生命にあらず、生活平和なるも永遠の安樂にあらず、此の無常の人に於て常住の光明を與ふるものは如來の大悲なり、苦惱の人生に於て永劫の安樂を來すものは無爲の淨刹なり、吾人此如來の大慈大悲に遇ひたてまつりてこそ初めて人生に於ける眞意義を見出すを得ん、富貴に處するも大悲の御惠也、貧賤に處するも大悲の御惠也、衣をたゝきても南無阿彌陀佛、疊をたゝきても南無阿彌陀佛、人生一として南無阿彌陀佛の恩寵ならざるはなし、南無阿彌陀佛をとなふれば、諸佛菩薩、天神地祇、日月星辰、草木國土、山河大地に至るまで悉く護持養育したまはざることなし、現世利益といひ、現生十種益といふもの、畢竟信樂開發の一念よりあらはれ來る眞人生の意義たらずんはあらざる也。

然るに世人、此の如き眞人生の淵源たる大慈大悲の本願を仰がずして其餘流たる人生の幸福を追はんとす、恰かも是れ蒔かずして刈り入れんとし、元金なくして利子を得んとするもの、思はざるの甚しき也、人生若し如來の大悲を感せずんは、一粒の米も一點の水も眞に我等に與へらるゝことなけん、たとひ之を物質に得るも精神に之を失はん、人之を與ふるも己之を享くる能はざるべし、信なくして人生に生きんと求むるの人は戰はずして其勳功を得んとする人の如し、世の物質的に經營的に、研究的に、修養的に、人生を解決せんとする夫れ此の如し。

然るに世人動もすれば信を以て恰も主觀的、冥想的、架空的、若くば感動的に假設されたる氣休めの如く思考するもの多し、是恐くは信を去りて解決を外に求むる、現時の風潮を促し來りたる原因たるべし、是心を潛めて考量を費すべき要點なり若し果して信なるものにして主觀的冥想的架空的若くば感動的に假設したるものたらしめば、是パンを求むるものに石を與へたるものなり、苦を訴ふるものに魔醉を與ふるなり、飢を訴ふるものに畫餅を與ふるなり、蓋し世の宗教を說き信仰を口にするものにして果して眞のパンを與へつゝあるが將た石を與へつゝあるか、動もすれば石を與へてパンと稱し、畫餅を與へて糧に充てしめんとすることなきが、此の如くんば遂に醉醒め夢破れて人生一段の悽愴を感ずること免るべからず、蓋し近時の現實的風潮の來る此に原因せざるが、此の點に於ては吾人は寧ろ痛切なる悲哀向てに同情の涙を禁ずる能はず。

然れども此に斷々乎として警告す、此の如き假設的信仰の破綻に泣きて解決を信已外に求むるは他國に飄零せる窮子の如く可憐の至ならずや、此に眞信仰の眞人生を實現し得ることを悟らず、其反對の方角に走らんとす、倒行逆施甚しき也、此の如き五道の迷兒に向て大悲矜哀の本願を以てあらはれたまひし眞如來ましますことを知らざるか、此本願を信じたてまつらずんば、天地萬物一も恩寵を感ずるあたはざる當然也、衣食の恩も、生活の意義も、乃至父母の惠も中心之を感謝すべからざる固より其所也、若し我等眞如法界に向て漫然其恩寵を感じ得べくんば如來何ぞ特に五劫思惟の御苦勞ましまさん、忽然人生萬事に向て其意義を見出し得べくんは何ぞ超世無上の南無阿彌陀佛の本願を建てましまさん、眞信仰は此に在り、眞光明は此にあり、眞如來は此にましませり、一向專念といひ、一心正念といふ、此より外に人生の解決、否贖劫多生の大問題の解決の道あるごとし、常沒常流轉、無有出離之緣の無邊極濁惡の我等を極濟したまふ如來選擇の願心こそ我等至心信樂己を忘れて歸命尊重し奉る所なれ。

和讃に曰く、彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもちて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなりと、曇鸞大師偏に西方に歸する自督を傾けて曰く、吾既に凡夫智慧淺短なり、未た地位に入らず念力均しくすべけんや草を置て牛を引くに恒に心を槽櫪に繫ぎが如し、豈縱放にして全く歸するところなきことを得んやと、嗚呼是れ念佛一行三昧の功德にあらずや、道綽大師之を曇師の碑文に見て感動し、聖道萬行を閣きて唯有淨土一門可通入路と悟了したまひしにあらずや、法然聖人の專修專念親鸞聖人の一心一向皆是れ人生本願一實大の道の外なきことを顯示したまふ千古の鐵案也、是抑〻五劫思惟の起る所以にして光壽無量の如來の來現したまふ本願也、和讃に曰く超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへりと、若し我等宇宙に向て如是に觀し、人生に於て意義を直覺し得べくんば何ぞ如來の來現したまふことあらん、若し我等事々物々に向て其義理を究明し、諸善萬行を實修するを得べくんば、何ぞ圓備の嘉號を設けたまふことあらん、撞着矛盾の人生、迭相呑噬の世界、火宅無常の姿婆、煩惱具足の凡夫、天地の間、恢廓窈窕、浩々茫々として一點の光明を認むることなく、生死の大海滔々浩瀁として九死の間一生を見出すこと難し、

抑々此間に於て誰が人生の意義を求めん、何人か自己の歸趣を悟らん、噫々生の從來する所を知らず、死の趣向する所を知らず、冥より冥に入り、苦より苦に入る、嗚呼何れの行もおよびがたき身なればとても地獄は必定すみかぞかし、此間獨り盡十方無碍光如來選擇本願海より來現して無明の長夜を照し、生死の苦海を度したまふ、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし攝取してすてざれば、阿彌陀となつけたてまつる、吾人は此如來に一心に歸命したてまつりて、攝取光明の裏に稱名讃嘆して感恩報德の生活を營むの、外人生何の所にか意義を認めん、何れの道が往くべきの處あらん、而して此生活や何物をも包括して餘すなく、此道や何れの處にか通ぜざる所あらん、政治をなすも、實業をなすも、經營をなすも、勞作をなすも、士農工商、盡十方無碍光中の恩寵ならざるなく、貧富貴賤善惡順逆、配所の月を眺むるも、地獄の炎に燒かるゝも、粉骨摧身南無阿彌陀佛の感謝ならざるはなし、是即ち眞の佛子也、眞の人生也、眞の生命也、南無阿彌陀佛。

自督

歳晩の感謝

○覺如上人が御往生の前年即ち八十四歳の歳晩越年の用意をすべき御貯もなくあらせられし時、御弟子が十貫文とかの志を貰ふて持參せられたれば、上人非常に喜ばせられ、先以て正月佛前の御供を用意なされ、餘りを以て僅か御酒を買はせられ、アヽ今年はよい年越をしたと云ふて喜ばせられたといふことを我父は度々冬の夜長に話して下さつた、是が御一代中の氣樂な御越年で其翌年の御往生と思へば實に腸が裂かれるやうてある。

○蓮如上人大阪建立の御文にも、しかるに愚老當年の夏ごろより違例せしめて、今におきて本復のすがたこれなし、ついには當年寒中にはかならず往生の本懷をとぐべき條一定とおもひはんべり、あはれ〳〵存命のうちにみな〳〵信心決定あれがしと朝夕おもひはんべりとの御言を拜讀する母に胸塞がる次第てある。

○かくの如き代々善知識の御恩を思へば我等末弟尸位素餐何とも申譯がない、殊に當代我等有緣の善知識北國風雪の中に御苦勞下さることを思へば不冥加とも何共言語に絶する次第である『勿體なや祖師は紙衣の九十年』

○我等日々拜讀したてまつる歎異鈔を遺し下された如信上人、勿論たとひ唯圓坊の筆なりとするも畢竟同心一體の御方であれば法照少康を善導と見ると同樣に心得ればよい、其如信上人は御年六十歳の暮、大綱より十里も深き山中金澤の同朋の爲に態々御敎化の爲に御出なされ、一月四日此に御往生なされ其所に御墓があることを此頃承りた、先年大谷當御法主臺下が東京御修養の砌、御參詣なされて、多年荒凉に屬したる御墓を拂はれた、我等歎異鈔を拜見するものは御墓の所在をも知らずに居たといふは勿體ない、御跡を慕ふて御墓に詣てたいとの念が切になつた。

○「露命わづかに枯草の身にかゝりて候ほどにこそあひともなはしめたまふひと〳〵御不審をもうけたまはり聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まうしきかせまゐらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにて候はんずらめと嘆き存じ候ひて云云」といひ、「かなしきかなや、幸に念佛しながら直に報土にむまれずして、邊地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに信心ことなるとなからしめんためになく〳〵筆をそめて之をしるす、なづけて歎異鈔といふ」とあるを拜讀する度毎に親切痛酷身に泌みわたる心地がする。

○古往今來つく〳〵思ひ回らせば、かく安々と我等がいたゞかれる樣になつたは、中々一通りのことではない、芥子の地も捨身の處にあらざるはなし、想へば〳〵御開山の御聖敎にふれた猛々蠕動の輩てあつたか、御袈裟を掛けて召させられたる魚類の生を受けたか、今日此の如き本願に遇ひてまゐることを得たるは、實に多生曠劫の宿緣の純熟したる御惠てある、噫弘誓の强緣は多生にも遇ひ難く、眞實の信心は億劫にも得がたし、偶々行信を得ば遠く宿緣を喜べ、南無阿彌陀佛々々々々々々

○過去七八年、實に夢の如く過ぎ去つた、いよ〳〵四十の坂を越すことになつた、嗚呼我老たり矣と言ふべしじや、併聖人の御一代を伺へば正に御流罪終りて信濃を經て、關東に足を留めたまひし頃じや、二十餘年の御苦勞を思へば是から少しは御報謝をさして貰はねばならぬ。

○三十而立、四十不惑といふが、古聖人ならざるも人間思想

の經過は其人相應に此軌道を踏むやうてある、二十八歳の末段々御慈悲に氣附かせて頂いてから、或は活動、或は靜止、或は踊躍歡喜、或は無事平安、或は粉骨碎身、或は靜思觀知いろ〳〵味はせていたゞき右に左に樣々に御手引に預りてさて何か殘るかと言へば拯濟無邊極濁惡は我事也と何んとやらんおちつかせていたゞいた。

○往事茫々跡夢の如しである、殊に一々跡つけて見るになめくじりの跡の如きものてある、されど御回向の御信心の御影て一貫して粗末なから意義のあるだけが難有い、信を得ずして喜ばんと思ふは糸を結ばずして物を縫ふやうなものてある、如何に立派に縫ふても畢竟空に過ぎないのてある、信を得たる生活は糸を結びて物を縫ふやうなものてある、隨分不整頓無作法の跡を歴然と殘して置くけれども、歪みなりに一貫して意義を殘し置くことの出來たは御信心の賜てある。

○今年も三百六十五日、頗る不作法に右に左に斜に歪みなりに先々無事に縫はして、いたゞいた、しかも相續の糸は斷續常なけれど不斷難思の光益によりて信の一は常恒にして心不斷なるは實に難有いとも忝ないとも申樣がない。

○五年前の暮小供が亡くなつた昨年の暮は小供が病氣をした、其他毎年暮には何時も苦悶が多いのが過去六七年の常てあつた、今年は今分ては割合に生平に越年を爲して貰へる樣に思へる、南無阿彌陀佛、しかし無事を喜ぶべきてはない、いかなる水火の中ても南無阿彌陀佛の白道は西の彼岸迄續て下さる

○一たびも佛をたのむ心こそ、まことの法にかなふ道なれ」、「罪ふかく如來をたのむ身になれば、法の力に西へこそゆけ」「西へゆく道に心のさだまれば南無阿彌陀佛ととなへこそすれ」一たび信の結目を作れば縫ふ毎に無駄にはならず、一歩々々自然に西へ運ばせていたゞきて、感謝の稱名の外はない。

○信仰の輕過としては苦痛も不幸も皆意味あることゝなる、何んとなれば人生の苦痛多くなるにつきて御慈悲を喜び、不幸の場合に却て御信心を相續させていたゞくゆへてある。

○來年も亦信の一筋にて貫かせていたゞきたい、暦はかはれども南無阿彌陀佛一つは變りがない、蓮如上人の仰せには無益の歳末の禮かな、歳末の禮には信心をとつて禮にせよ、又明應二年正月一日勸修寺村の道德御前へまゐりたるに仰せられて曰く、道德はいつくになるぞ、道德念佛申さるべしと、年の暮るも南無阿彌陀佛、正月にも南無阿彌陀佛、千年萬年無量壽まて南無阿彌陀佛てある。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

講話

信疑の得失

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日私のお話しいたしたいと思ふ事は、信疑の得失と云ふ事てあります。信ずると疑ふとの得失と云ふ事は、則ち信疑の二道によりて非常な別れ目になる。信に入るのと疑に流れるのとの別れ目によりて左と右と、東と西と大違ひになる。此信疑の別れ目が元になりて兩方に向ひ、此人生上萬事に於いて方向が違ふてくる故、今日は其事をよくお話いたしたいと思ふのてあります。

結局、如來の御慈悲を戴く段になりては申すまてもなく信仰の一より外はない。如來の廣大な御思召をば信ぜさせて戴いてみれば其廣大な御慈悲を疑ふ事が出來ぬ。これが信てある。其信と、これをば得ずして、疑に流れるのとは唯一つの別れ目なれど、其一つの別れ目が大違ひになる故、誠に氣をつけねばならぬのてある。御開山聖人御一代のうち御苦勞下された要點は、此御慈悲を信ぜよ、佛智を疑ふ勿れと、其信疑の得失を常に御示し下されたのが御一代の御教化てある。一口に云へばこうてある。如來の廣大な御助けのありがたき事を聞けば、誰しも有り難く尊く思はぬ者は無けれども、唯自分て有り難いと思ふたゞけてはいかぬ。眞の思召しを知らねばだめてある。今が今親樣が私共を哀れんて居て下さる。此やるせなき大慈大悲に一たび氣が附いて下されたのが一念の信て、此上は忘れやうと思ふても取り去る事が出來ぬ樣に佛の親の御慈悲を知らせて貰ふたのが信てある。此の如く御慈悲を信ずるのと、氣づかぬのとは大違ひ、御開山聖人が法然上人の御教化を喜び給ひた。其御教化とは『正信偈』に、

生死輪轉の家に還來することは、決するに疑情を以て所止と爲し、速に寂靜無爲の樂に入ることは、必ず信心を以て能入と爲す。

いつまても生死の家に迷ふ事は、廣大な如來の御慈悲を疑ふ事が生死の家にとゞまる所以てある。速に寂靜無爲の樂に入るには、信心を以て行けるのてあると、法然上人の喜ばれてあるのを御開山聖人は其儘信ぜられた。師上人が仰せられたからてない。其言葉通りが、あなたの御信心に現はれてあるのてある。和讃て戴くと、

諸佛方便ときいたり　源空ひじりとしめしつゝ
無上の信心をしへてぞ、　涅槃のかどをば開きける。
やるせなき御慈悲により、法然上人が出てきて下され、懇々とお說き下され、佛の御惠みを信ぜよと無上の信心を敎へて下され、遂に涅槃の境界へ行かして下された。

眞の智識にあふ事は、　かたきがなかになほかたし
流轉輪廻のきはなきは、　疑城のさはりにしくぞなき。

眞の智識に遇ふ事は實に難き事てある。いつまても我々が迷ふといふは、つまり廣大な御慈悲を疑ふ事が大なる迷ひのも

とてある、信と疑の別れめである。一口に云ふとなか易〳〵い樣でありながら難い。又味はへば味はふ程深い。

此二三日前、今此處に來て居られる岡田さんが、親の祥月命日であると云ふて、一夜私を尋ねて下された。種々ありがたい話をした。其時岡田さんの一言いはれた言葉は、其時私は何氣なく聞いて居たが後より味はふと誠にありがたい。それは何かといふに、岡田さんの父上は非常な有り難い信心のかたい方で、存命中常に話されたのは、法然上人と云ふ方はえらい方てある、上人は人の心などはちやんと知りぬいて居られる。其上て廣大な本願を聞かして下されたのてあると。話の中なれど一寸いはねばならぬ。是は何を云はれたかといふにつまり撰擇本願の事てある。末代になれば、人は皆愚痴、無智、貧窮困乏で、戒も持てず、親孝行も出來ず、菩提心も起せぬ、爲てみやう無き者と上人がかねて、御見込み下された。これはたゞ人の心を察したといふ丈てはなく、自分て通れ無かつた故人も通る事は難いと、我身の經驗により人も其通りてあると御見込み下されたのてある。これが可哀さうな、これがあはれてあると、やるせなく思召し下されたのが佛の本願である。佛の本願といふ事は永い間云ふて居るが、實に難有い事て、信の抑々起るといふのは、此本願があるからてある、信ぜられる樣にチャンとしてあるが故に、我らが信ぜられるのてある。

人世的の言葉から云へば、我々の樣に愚痴をこぼし、かく有ればよい、かうもあればよいと思へど儘にはならぬ、自分の考も當てには爲らぬ。怒るかとおもへば喜ぶ、此樣な淺ましい世の中である。夫を實は佛が昔より能く御存じて、其迷へる者が可哀いゝと思召して本願を建てゝ下されたのてある。法然上人は佛がかくしろしめして居られる通り、能く其御慈悲を知り、我身の淺ましきを自覺されたのてある。而して又我々も其通りて、何事も出來ぬ愚痴無智なる事を見込みて下されたのてある。

此事は實に信じ易い樣てなか〳〵さうは戴けぬ。三百餘人の法然上人の御弟子中、これを其通り信じ得られた人は實に少なかつたのてある。多くはあゝだ、かうだと種々上人の御言葉に附け加へて、理屈に流れたり自力に落ちたりしたが、御開山聖人は唯其まゝハイと御受けなされたのてある。是が實に大事な事て、向ふてよく心をしり、チャンと其儘信ぜられる樣にしてあるのが御本願である。其を其儘ハイと受けられたのが親鸞聖人てある。他の人は左樣てない。佛は其樣に我々を助けて下される故に出來るならばよくせにやならぬとか、爲てみやうない者だと我身を悔いてみたり、助けて呉れるのかと聞いてみたり、助けて下さると思ふて見たり、又如何てもいゝわと横着いふたりする、これてはいかぬ。唯佛の仰のまゝをハイと受けるだけてある。これを聞き損ふと、これは御開山聖人は素直な人なればハイと受けられたのてあると思ふ。さうてはない、それては御開山の御供は出來ぬ。我々も永い間理屈を並べて居たのぢや。段々と聞かせてもらへば、佛が此樣な者を見捨て給はぬ御慈悲をしみ〳〵と味はゝせて貰ひ、あまり、御親切なるもの故に、ハイと御受けの出來る樣な人間ては無けれども、ハイと聞かずにや居られぬ、てか

くの如く御開山の御供をして行くのてある。岡田さんは實にありがたく、段々と雜誌などて喜こばして貰ふと云ふて其夜は歸られた。あとでつく〳〵と私は喜こんだ。罪深ければこそ御助けが有るのてある。私はとても戒を持てぬ、これ故御助けが有るのてある。私は親孝行出來ぬ、其者を哀れと思召し、又五逆十惡の苦しめる者をそれだから助けてやると云ふて下さる。

阿闍世王の例を以て云へば、『涅槃經』にかくいふてある。佛が跋提河のほとりに於て將に涅槃に入らんとしたまひし時、釋尊の御弟子が澤山集まりて來られた。かう云ふ菩薩、かく〳〵の神々、皆集まつて來られた。然るに唯阿闍世及阿闍世の眷屬を除くと云ふ事が其初めから斷はつてある。諸神諸菩薩皆泣き悲しんて願はくよ涅槃に入らずして此世にもつと止まり給へと佛に乞ふた。たゞ阿闍世王のみを除いてある。佛は如何してもこれを御聞き入れなかつた。佛は八十餘年隨分多くの人を度し、全印度佛の敎へに靡かぬものはなかつたが、唯阿闍世王のみ今に救ふ事が出來ぬ。されば今將に涅槃に入らんとして例ひ諸神諸菩薩がいくら云ふても止まり給ふ事なけれど、唯阿闍世一人の爲に涅槃に入る事が出來ぬ。そこへやつと阿闍世王が出てきた。佛は一代佛敎に仇をなした五逆十惡の阿闍世王に殊に聞かせ度いのてある。佛法の本意は、如來の御心に背いて居る罪の深き者を目的にして有る。佛は已に背いて居る罪深き者程哀れんで居られる。これが選擇本願の心、阿彌陀佛の御心である。されば本願醍醐の妙藥と經にはあります。『涅槃經』の大體は逆惡の者を捨てぬと云ふ事が書いて有る故、是を醍醐味と云ふのてある。此の如き佛のやるせなき御心を聞けば信ずると云ふて力んで信ずるのてはない。信ぜにや居られぬから信ずるのてある。かう云ふものを見捨てぬ御慈悲で御座りますかと、ハイと頂く斗りてある。信心の狀態、現象など調べて居ては、なか〳〵信には入れぬ。此方て信ずる信ではない、此方の心、狀態を皆しろしめして、其者がかはいさうだと思召して本願を建てゝ下されたの故其儘頂くばかりてある。『正信偈』に、

「眞宗の敎證を片州に興し選擇の本願を惡世に弘む。云云。」

とある。此撰擇の本願を惡世に弘めて下された故、たゞハイと頂く斗りてあります。無遍の極濁惡が撰擇本願により此儘助けていたゞけるのてある。此見捨てぬ如來の御心を知らせて貰ふのが信心てある。

道俗時衆共に心を同じうして、唯斯の高僧の說を信すべし。

其高僧の說をハイと頂けと云ふのてある。成程御慈悲に氣附いた時には、俄かに氣附くもの故に樣子が全く變つて仕舞ふ。けれども此方て變るのてはない。附き纏ふて下される御慈悲に今が今氣附かせて貰ふた故、かく變らざるを得ぬ。こゝが信ずると信ぜぬの別れ目てある。佛は信ぜにや居られぬ樣に段々と御手引して下されるのてある。岡田さんの御話から、昔の事を思ひ出した。丁度今より六七年前、岡田さんが父上の追悼の爲觀音の御姿を畫き、弟の君に渡してありました。私が數年前信州に參りました時、此觀音を弟の方が持つて參られ私に讃をせよとの事てありました。て七月二十四日の朝

私は大層御慈悲を喜こばせて貰ひ居りしまゝ、讃を書きました。其中に「靈界冥々測るべからず。自然法爾無義を義とす。渺たり蒼海之一粟。凡小何爲佛意を知らん。山間忽ち落つ花一輪。長江萬里水上に浮ぶ。飄然去來彼岸に到る。人生百年光悠々」。と云ふ事を咏みました。これは佛の境界は不可思議である。佛の御心には種々思召あつて、我等を助けて下さるのである。廣大な佛が自然に御力を御加へ下される故、我々何の力も用ひぬのである。佛の方より力を加へて信ぜさせてもらふ「渺たり蒼海之一粟」われら凡夫如何して佛の境界が計られやう。花が一輪山間から落ちた樣なもので、佛の御はからひにまかせ奉りし上は、花が長い〳〵川を流れて彼岸に着く樣に、われ〳〵が段々と御導きに預り、信心の海に入るのである。其廣大な御慈悲のうちに在りて「人生百年光悠々」。或は右に或は左に、遂に佛の涅槃の境界へ導びきて貰ふのである。是を岡田さんが其後に御覽になり、これが御緣になりて、信仰に入られたのである。

此の如く段々佛の御慈悲の深き事を知らせて貰へば信ぜにやならん。佛の御めぐみが身に附き纏ふて下さる故、信ぜにや居られぬ。御開山聖人が法然上人の仰せを信じ給ひしは、つまり、これまでの過ぎこし方をおもへば、かゝるものを見捨てず、手を換へ品を換へ、御念力を蒙むつて居るに、今が今迄氣附かなんだ、誠に相濟まん事である。愚痴、無智、持戒、孝養父母奉事師長の出來ぬものとは、人の事ぢやない、親鸞一人の事を云ふたものである。自分の爲に法然上人はお示し下されたのである。實にありがたいと信ぜられた。上人は他の事はない。本願には間違はないぞ、

當に知るべし、本誓重願空しからず、衆生正念すれば必らず往生を得。

とあれば、源空は此御慈悲に救はれて淨土に行くのである。してみれば、源空の行かん處へ行くと思へ、自分も南無阿彌陀佛を稱へさして貰ふて居る故間違ひない、追つて來いと仰せられる故、親鸞聖人は、

たとひ地獄なりとも故上人のわたらせ給ふ處へまゐるべし

と思ひ定めたれば善惡の生處私の定むる處に非ず、と信じられたのである。聖人は種々と修養もしてみたし座禪もやつてみたが、其効が無かつた。唯此本願によりて助けられたのである。されば此御慈悲により私について來いと法然上人が言つて下されたも私一人の爲め。長々の佛の御苦勞は私一人の爲であると喜こばれ、ハイと頂かれたのである。あまりくどくなるが此ハイと頂かれたるも道德上すなほだといふのではない。私の行く處へ行くとおもへと遠慮なく法然上人がいはれたも、ハイと御開山が頂くも、此やるせなき御慈悲を頂けば、是を信ぜずにや居られぬからである。たとひこれを捨てやうとしてもだめである。例ひ地獄に落ちんとも、もとより何れの行も及び難きものであると、自分で思ひ切つたのぢやない。いかにも仰せ通り、何れの行も及び難き私、仰せ通り濁惡の凡夫である。かゝる者を見捨て下さらぬ御慈悲が有り難いと聖人は受けられたのである。

此間山形へ御緣か熟して參りました。其時種々御世話になりました方の兄上の原卓一氏より手紙がまゐりまして、其

終りに、

曠劫多生の間にも、　　出離の强緣しらざりき、
本師源空ゐまさずば、　　此度むなしくすぎなまし。

と書いて下さいました。誠に我々安心の出來ると云ふのは、やるせなき如來の大願業力が私の身の上に及びて下され、種々と御方便下されしにより始めて私の身上に此御慈悲を知らせて貰ふ事が出來たのである。我々は長い間、是を知らなんだのである。空しく我々は流轉して居たのである。曠劫多生が如何であつたか、我等はわからぬが、隨分長い間の事である、本師源空が御出ましなかりせば、又其如く闇に闇を重ね、惱みに惱みを加へねばならぬ。とても出離の時は無いであらう。此の如き者を見捨てず、哀れと思召し下されたのが本願であり、阿彌陀佛であり念佛である。此念佛一つを知らせに御出下されたのが法然上人である。此思召につき多生曠劫の和讃を段々と味はゝして貰ふとありがたい。

此終りの和讃に大勢至菩薩の讃がある。つまり法然上人の事を云ふたのである。

超日月光この身には、　　念佛三昧行ぜしむ、
十方の如來は衆生を、　　一子の如く憐念す。
子の母をおもふごとくにて、衆生佛を憶すれば、
現前當來遠からず、　　如來を拜見疑はず。

此等は皆『首楞嚴經』に說いて有る御言葉によりて云はれたのである。超日月光の阿彌陀佛が御出て下され、念佛三昧を行ぜしめて下さる。十方の如來は我等を一子の如くに哀れんで下されるのである。又其次の和讃に子の親を思が如くとあれど、これは此方の方から母を思ふのでない。此の如き御恩あれば思はずにや居られぬ、『愚禿鈔』のうちに『大論』を引きて曰く、

譬へば魚母の若し、子を念ぜざれば、子即壞爛する等の如し、

とある。十方の如來が其樣に思ふて居て下さればこそ、始めて我等が氣附けられるのである。子の母を憶ふが如く佛を思へば、廣大な御慈悲の御念力が屆いて遂に信心が得られるのである。

染香人の其身には、　　香氣あるがごとくなり、
これをすなはち名づけてぞ、香光莊嚴と申すなる。

御信心を喜ぶ人は佛の御光が行き渡つて下され、恰かも身に香氣あるが如くである。常に如來の極樂土の莊嚴のうちに居ると同樣である。『首楞嚴經』に大勢至菩薩の言葉に

われもと因時にありしとき、念佛の心をもちてこそ、
無正忍には入りしかば、　　いまこの娑婆界にして、
念佛のひとを攝取して、　　淨土に歸せしむるなり、
大勢至菩薩の、　　大恩深く報ずべし。

といふ通りの文があります。つまり大勢至菩薩が法然上人と示現し、大勢至菩薩の願を御廣め下されたのである。此大勢至菩薩の御恩を受けて我らが助けて貰はれるのであると喜ばれたのが御開山聖人の御頂きなされし樣であります。法然上人の御示し下された南無阿彌陀佛の六字は、此廣大な御慈悲を知らせて下されたのである。親鸞一人が爲なりけりと喜んで下されたのが親鸞聖人の御信心である。

先日越後の人が次の三首の和讃を書いて來て喜ばれました。それは、

救世觀音大菩薩、　聖德皇と示現して、
多々のごとくすてずして、　阿摩のごとくにそひたまふ。
無始よりこのかた此世まで、　聖德皇のあはれみに、
多々のごとくにそひたまひ、　阿摩のごとくにおはします。
聖德皇のあはれみて、　佛智不思議の誓願に、
すゝめいれしめたまひてぞ、　住正定聚の身となれる。

佛が種々と方便して父の如く捨てず、母の如く我々の身にそふて守つて下さる。多生曠劫の昔から此御慈悲に入れんと種々と御手まわし下され、此世まであはれみ給ひ、哀れみかむり、遂に佛智不思議の誓願にすゝめ入れしめ給ひたのである。御開山聖人が法然上人の御教化を承り給ひても、我々の身の上に立派な行の出來るもの、出家得道の出來るものであると云ふのならば、我々には出來ぬけれども、太子が喜んで下されし通り、世俗の樣を以て、御示し下され、政治にまれ、實業にまれ、太子の如く其儘御慈悲を頂くのであると見せて下された。

即ち御開山は磯長、六角堂等に於て、愈々罪深き者を哀れみ給ふ御慈悲を氣付き給ひた。罪深き煩惱熾盛の者とは他事でない、私の事である。此者を捨てぬと云ふ大悲の親の思ひは昔より父母の如くに思ふて下された。母の如くやるせなき心もて居て下されたに、其廣大なる親の心を無き者にし、自身を悲しんで見たり、喜ばにやならぬと世間に求めたり、歎いたりして苦しみて居た。自分の樣な者がよくならんとして居たは恰かも石が浮ばうとして居たも同樣である。浮べぬ者なればこそ、見捨てず浮ばして下されたのが佛の御慈悲である。と段々と御手引を蒙むられた。即ち法然上人は念佛をもて、助けて下されると知らせ給ひ、太子は罪深い事を知らせて下さる。此二菩薩の引接により、全く安心がおつきなされたのである。

してみれば南無阿彌陀佛も、本願も何から何に至るまで天神地祇も悉く我一人の爲めと云ふ喜びが湧いて來る。山河大地に至るまで何一つとして我に此御慈悲を知らせる爲、又念佛の人を守る爲でないものは無かつた。今日までに廣大な御恩を戴きたのであつた。信の一つがわかりてより世界萬物悉く御方便御守護の爲、萬物みな喜びを守り給ふ御慈悲となつたのである。こゝが實に大事な處である。何もかも一人の爲である。こゝより次の現世利益和讃が出て來るのである。

阿彌陀如來來化して、　息災延命のためにとて
金光明の壽量品、　ときおきたまへるみのりなり

何も息災を祈るのではない。利益を願ふでない、が此御慈悲を喜ぶうちに段々と御利益を蒙むるのである。

山家の傳敎大師は、　國土人民をあはれみて、
七難消滅の誦文には、　南無阿彌陀佛をとなふべし。
一切の功德にすぐれたる、　南無阿彌陀佛をとなふれば、
三世の重障みなゝがら、　かならず轉じて輕微なり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、　此世の利益きはもなし、
流轉輪廻のつみきえて、　定業中夭のぞこりぬ。

こゝは氣附けにやならぬ。その樣に利益があるから南無阿彌

陀佛を稱へにやならんぢやない、一度佛の御慈悲に氣附いて御念佛を稱ふれば、自然にそうなるのである。此處は實に氣附くべきありがたい事で、如來のお慈悲でなくば行かぬ。此闇のうちに一本の蠟燭を燈し、百萬千萬の蠟燭を點じたつてだめ。此事をあゝし、こうせにやならんと眞劍にやりても、五十年百年の事皆滅びて仕舞ふ。例へ如何な事ありても一度夜が明けねば駄目である。佛の大慈の御光をもつて照して下されゝば。必らず、無上淨信の曉に到りぬれば、三有生死之雲晴れて、淸淨無碍光耀朗らかに、一如法界眞身顯はる」の御文の如く、すつかりと生死の雲が晴れて仕舞ふ。ありがたう御座りますと喜べば一本も蠟燭など燈す事入らぬ。一度南無阿彌陀佛の御光にあへば、左右東西、世界悉く此私に御慈悲を知らせん爲の御慈悲、信心の人を護持養育する御手引と喜ぶ事が出來るのである。是れ一つが誠にありがたい。一つ一つの御恩を如何に數へて思ふても解らぬ。百本千本の蠟燭を燈しても無駄である、大體が明るくならねばだめである。御慈悲がわかれば悉く世の中が明るくなる。信疑の得失とは此處である。一度御慈悲に氣附けば盡十方無碍、行き渡らぬ處はない。

昨日或方の御話には人生と云ふものは種々と自分の思と憧着し、衝突する樣である。此方の思ふ樣にすれば人に苦勞かける。人によくせんとすれば我身が立たぬ、といはれた。それは其筈である。御慈悲に氣付かぬうちは皆憧着するのである。人の損する時は自分の利益となり、自分で利する時は人に損失をかける。佛の御慈悲の夜が明けぬうちは皆駄目である。されど夜が明ければ佛の御心はもと〳〵誰も誰も御恩の下に統一されて、よく調和されてある故、皆都合よく行くのである。然るを自分の指金で計らふとするもの故ヲチコチぶつかつて、如何も出來ぬ樣になるのである。御信心とは自分のさしがねの曲れるを知り、始めて南無阿彌陀佛の指金に順ずるのである。南無阿彌陀佛のさしがねの下には悉く統一されるのである。自分をよくせんと思ふは間違つたる事を思ふてるのである。御慈悲を一つ聞かして貰へば自分の惡しきを知られるのである。恩を知らせて貰ふと今までの指金をもて世をあゝかうと思ふぢやない、とたゞ南無阿彌陀佛の一つになる。此南無阿彌陀佛の下に佛は廣大な御慈悲をもて眺めて下されたのである。逆樣に自分の思を以て思ふ樣にしようとするならば、たとひ南無阿彌陀佛を稱へても駄目である。つまり自分の思が先に立つて、其手段に南無阿彌陀佛を稱へる故、皆衝突して仕舞ふ。

此方の指金が間違ふてあつたと知れるのは、如何しても我として解る筈は無けれ共、惡しき者を見捨てぬといふ、佛の指金あれば私が惡るかつた、間違つたと知らせて貰ふ事が出來るのである。和讃に

南無阿彌陀佛を稱ふれば、　堅穿地祇は尊敬す、
かげとかたちとのごとくにて、　よるひるつねにまもるなり。

とある。此樣に一つわかつてみれば、神々は常に守つて居て下さるのである。佛の御恩が氣づかねば、思ふ樣に行かぬと苦しんで、居ねばならぬ。つまりいらぬ指金を持つて居るからである。自分の指金を捨てゝ佛の指金斗りで行くのである。

さうすれば何の光も無いと思ふて居る世も思ふ樣に行くのである。

南無阿彌陀佛をとなふれば、難陀跋難大龍等、
无量の龍神尊敬し、　よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、炎魔法王尊敬す、
五道の冥官みなともに、　よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、他化天の大魔王、
釋迦牟尼佛のみまへにて、　まもらんとこそちかひしか。
天神地祇はこと〳〵く、　善鬼神となづけたり、
これらの善神みなともに、　念佛のひとをまもるなり。
願力不思議の信心は、　大菩提心なりければ、
天地にみてる惡鬼神、　みなこと〳〵くおそるなり。

とう〳〵終りに信心と云ふ事が出てきました。信心の人をばすべての惡魔が皆悉く恐るのである。御慈悲に攝取された者はもはや佛の御膝にのつた樣なものである。如何なる惡鬼神と雖も是を犯す事は出來ぬ。

南無阿彌陀佛をとなふれば、觀音勢至もろともに、
恒沙塵數の菩薩と、　かげのごとくに身にそへり。
無碍光佛のひかりには、　無數の阿彌陀まし〳〵て、
化佛おの〳〵ごと〳〵く、　眞實信心をまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、十方無量の諸佛は、
百重千重圍繞して、　よろこびまもりたまふなり。

此現世利益和讃は丁度大勢至菩薩の和讃の前にあります。即ち如來の御慈悲を一度氣附かせて貰へば、光の當たらぬ處はない。人世は悉く此通りてある。前に擧げたる和讃の如く守つて下さる世の有樣てある。處が少しの處で信疑の別れ目になる。たゞ少しの事てある。今日のいひたいのはこゝてある。これほど廣大な御慈悲ありながら、自分の樣な罪深き者は、佛に見捨てられるだらう。又佛を疑ふにはあらねど、佛樣の居られる樣な氣がしないなど云ふてるは、皆自分の指金をもつて廣大は佛の境界を計つて居るのてある。されば片方に利益和讃を此の如くあげたと對に、疑惑和讃といふのが一方にあげてある。

不了佛智のしるしには、　如來の諸智を疑惑して、
罪福信じ善本を、　たのめば邊地にとまるなり。
佛智の不思議をうたがひて、　自力の稱念このむゆへ、
邊地懈慢にとゞまりて　佛恩報ずるこゝろなし。
罪福信ずる行者は、　佛智の不思議をうたがひて、
疑城胎宮にとゞまれば、　三寶にはなれたてまつる。

信疑の別れ目は此處てある。疑ふつもりてないが信ぜられぬと人は云ふが、信ずると云ふは信じやうとして信ずるには非ず、既に如來が自分の樣な罪深きものを見捨てぬぞよ、と云ふ親心の他はない。此心より現はれ給ひしが無碍光佛てある。其御姿が直ぐに光明てある。罪深き者を救はんと云ふのが念佛てある。南無阿彌陀佛とは衆生を哀れみ給ふ御姿てあり、御心てあり、御聲てある。理屈や道理てあれこれ思ふてない、よき人の仰せを蒙むりて信ずるより他にはないのてある。とてもわれ〳〵に解る筈は無いのてある。解るのは、唯不可思議と解らして貰ふ斗りてある。是を知らせんとて昔より眺めて居て下された佛樣は實にありがたいと云ふより他はない。

此廣大な御恩に氣附けば、佛智不思議を疑ふと思ふても疑はれぬ。御不思議斗りて纏はれて居るのてある。「佛智不思議の誓願の、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり。」とある。此不思議の誓願を知らせんとて、法然上人も御出ましなされたのてある。親鸞聖人も磯長の御疑て夢の告を受けられたを初めとして、佛智不思議の御手引を受けて助けられ給ふたのてある。佛智不思議を疑ふは我が、さしがねを持て居たのてある。日輪が現はれた上は蠟燭やランプは皆入らぬのてある。「念佛にまさるべき善なきが故に」て世の事は彼是入らぬ。皆如來樣がよき樣にして下さる。自分のみならず、十方の衆生皆左樣てある。善いとか惡るいとか云ふてるは馬鹿〳〵しい。丁度お箸しがガチャ〳〵と放り出された時は頗る憧着して居る樣なれ共、ちやんと揃へて見れば、皆統一されるのてある。其樣に皆同じ御慈悲に氣附いてみれば、十方微塵世界皆同じ御慈悲を頂き、皆頭を下げて揃へられるのてある。ガテャ〳〵になつて居る故互に衝突するのてある。ガテ〳〵になつて居る各が皆自分の樣に人もせう、世間もせうとするとも出來ぬのは當り前てある。佛を信じた上は皆共に手をとり、頭を下げ打揃ふて佛の膝下に行く樣になるのてある。佛が「十方の衆生」と呼ばれた時は、我々皆揃へらてあるものてある。然るに其肝心なる佛の大道に行かぬもの故、世の中が思ふに委せぬのてある。甚だ冷靜な話て信仰を喜ぶ人に、まぬるいが、世の中の樣が何故方向が大逆樣になりて居るかと云ふに、皆自分を標準にして行かうとして居る。つまりよく云へば實行といふ樣な事ぢや。自分を標準にして實行するといへば、よき樣なれど、これてもいかぬ。何事も自分を捨てゝ佛に從ひて實行するなら善いが、左樣てない。曲れる自分を標準にする事は駄目てある。

近頃の樣子は何だか信仰の方へ遠くなりた。近頃の世間の樣子てはよほど云はねば信仰の事は通り憎くゝなつた。御信心頂かぬ人は信心と云ふ事は感情だと、かく思ふて居る。自分が何とはなくほの〳〵と喜んて、心のうちに喜ぶ樣が信心ぢや、左樣いふ風に云ふてるが信心ぢや、其本は何てもかまはぬ、さういふ心の狀態てあると思ふてる。信仰者から云へば、これは大間違ひといはねばならぬ。信心と云ふのは感情ぢやない、ほんとうの道がわかつた事てある。一寸考へると御信心は感情の方て智力の方てない樣てあるが、實は智慧も〳〵、道理理屈てない、所謂無分別智と云ふ智慧てある。經には廣大勝解と云ふてある。世の中に解り切つたと云ふ事は御信心て解つたほど能く解る事は無い。成程世は無常にちがひない、苦しきものに違ひない、あゝも惱みかうも苦しんて居るが、佛の御慈悲の一道より他は無いと思へば、徒らに苦しむべからざるを苦しみ、そらごと、たわごとまことある事なき世に、當てに出來ぬことを當てにして居た、たゞ念佛のみまことにおはしますと氣附いて、即ち夜が明けて見れば、御信心喜ぶより他はない。其仰せ通り其道を歩む他に他道に行くことは出來ぬ。世の中の事他に一つも無い、「兎の毛、羊の毛のさきに居る塵ばかりも、つくる罪の宿業にあらざることなし」といへば、何一つ業報てないものはない故とても自分の力ては如何とも動けぬ。われ〳〵の力てはかなはぬ、此事を佛

はよくしろしめして、即ち廣大な佛の御力で助けて下さる。其御恩に從ひ奉る他は無い。我身の善いと思ふて計ふも駄目、我身を善くせんと思ふても駄目である。過去の業なれば致方はない。此業の者をちやんとよく知つて、チャン〳〵とよき樣に運んで下さる。此他に御開山の御喜びはない。此處が信疑の得失の別れ目である。

歎異鈔に「親鸞は父母孝養の爲に一遍にて念佛まうしたるとさふらはず、」とあります。これは廣大な如來のおはします上は何の計らひも無し。佛天の御はからひに任すべしと云ふは、佛がよく呑み込んで居て下されば、心配するなと云ふ事である。たゞこれも、あれも、運命だとあきらめる事ぢやない。廣大な御慈悲に任せ奉りて、喜ぶのである。自分のさしがねて計る時は苦しけれど、廣大な佛の御さしがねに從へば、何も心配はない、自分の親の爲に情や道德から云ふても、親の爲にするは善いに違ひない。しかるに殊に此世の利害ぢやなしに、未來浮沈の大問題の爲に、ほんのやさしい念佛一つも稱へないとは、實に際どい言葉である。これは如何いふ事かと云ふに、此親鸞が一聲の念佛も稱へられゝば稱へもしよう。一聲の念佛も自分のものぢやない。親を浮ばせやうと云ふても　念佛は稱へられぬ。してみやうもなき者親も私も皆如來が助けて下さるより他はない、自分が佛に救はれて極樂へ行けば、世々生々の父母兄弟も皆助けられる樣に佛がチャンとよくして置いて下さると云ふのである。

種々申しますが御開山聖人のなされたうちに、御經をば石に書寫し、餓饉濟度、大蛇濟度をなされし事があつた。現に私は其石を人から貰ひました。こゝは今日云ふ題の大事な處で、父母兄弟の爲に一遍にても念佛しないと云はれたのに、或は餓饉、或は大蛇の爲に寫經して濟度なされると云ふのは如何も不思議である。御開山聖人も其樣になされた故、我々も一つ石に字を書いてみたら濟度も出來やうと思ふてはいかぬ。これは事實に顯はれた信疑の得失である。御開山は親鸞が字を書き、親鸞が濟度するなど云ふ心は毫もないのである。何も如來の御力で、經は佛の御經である。親鸞が書くと云ふ事は少しもない。經字を書きて直ぐ雜行雜修になるのと、信行になるのと大違ひである。北條泰時の處へ御開山聖人が招かれて、御食事の時、魚肉などを召し上るに袈裟を着したまゝで食された。未だ幼少であつた時頼が不審に思ひ、尋ねたら、聖人の申さるゝには、魚肉を喰ふと云ふ事は出家としては有るまじき事である。佛祖の冥監を仰いで慚愧の至りである。親鸞は如此き魚を食ふ者ぢや、我淺ましき奴ぢや、我として如何かな出來ぬ。親鸞は如此き何も出來ぬ者故、三世諸佛解脫幢相の袈裟をかけて食べたら、これで魚の浮ぶ事もあらうかと、此如く袈裟をかけて食べたのである、己れ自身は罪深きもの、袈裟をかける事ぢやない、袈裟が御緣になつて魚も浮べるのである。如來の思召は魚一つも見捨てぬと云ふおぼしめしなれば、魚の浮べるも自分がそうしてやるぢやない、悉く他力ぢや、我等で自分であゝかうと計らひをつけてやつたら、袈裟も道具にして仕舞ふ故、雜行雜修になるのである。御開山聖人の御弟子が叛いて行つた時御自筆の聖經を取り返さうと他の御弟子が云はれたを、御開山聖人は本尊聖經は如

來の流通物である、親鸞が書いた書かぬにはかゝはらぬ。親鸞の名が書いてある、汚らはしいと野山に捨つるとも、經に利益あれば、其處に居る虫けらまでも浮ぶ事があらう、捨てゝおけ。と云はれた。左樣だからとて、御經をばらまけば雜行になつて仕舞ふ。大間違ひである。

（信順を因緣とし疑謗を緣とし、信樂を願力に彰し妙果を安養に顯はさん）

如何てもかうでも如來の御慈悲に觸れた者は皆引接に遇ふ樣にしてあるのである。「義なきを義とし要なきを要とす」、唯御慈悲を知らせて貰ふばかり、こうのあゝのゝ計らひは駄目である。極樂へ往れんと欲して念佛稱へるもはやはからひである。極樂へ導びかん爲に念佛を下されたの故に、たゞハイと申して稱へるのみ。佛の御手まはして今日に到るまで、何より何に至るまで御導びき下されたのである。此廣大な御慈悲を頂きし上は鬼神を頼む事も入らぬ、吉日良辰をえらぶ事も入らぬ、世間や親や、子の事を心配する事も入らぬ。其信心一つ頂かして貰ふた上は

心だにまことのみちにかなひなばいのらずとても神やまもらん、

世の中の事チャンとよくしておきて下される。かくだん〳〵と喜こばして貰へば、是程不思議なる、氣持よき、明かな事はない。たゞ廣大な如來の御不思議と頂くより他はない。歸命と云ふ事も此方からする事てない。「歸命とは本願招喚の勅命なり」でハイと頂く事てあります。向ふから下されればハイと頂く他はないのてある。念佛稱へんと思ふ心のおこる時、ハイと稱へんとする時、もはや佛の懷のうちに入るのてある。佛の御姿は攝取して捨てぬ御姿と云ふより他はない。佛の智慧御恩、御功德は何の位有るか解らぬが、如來の御姿までが私一人の爲、彌陀の五劫思惟も私一人の爲、三世諸佛も私一人の爲、法然上人も私一人の爲、天神地祇宇宙に滿ちたる諸神皆我一人の爲と頂くのてある。親鸞聖人は他事はない。

悲哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑す、云々

愛欲名利の親鸞を見捨てず助けんが爲に、佛は御心配下されたのてありますと、佛御出世の本意、悉く親鸞一人の爲てある。御開山聖人は親鸞一人が爲めと頂かれたが、我々から戴けば此の如く頂いて下されたのは御開山聖人實に一人てある。佛の五劫思惟三世諸々の如來も是が爲に御心配を御懸けしたのてある。親鸞聖人の如く御信心喜べば佛も御滿足に思召し、天神地祇山、河大地、滿足の聲を放ちて喜んて下される。

私共は實に此親鸞聖人一人が有る爲に助かりたのてある。御開山は貰いうづ高いとあがめ奉る計りぢやない。愚かな親鸞ぢや、一人の爲の御恩ぢやと御喜び下されたればこそ、我等もこれを頂かれたのてある。我一人の爲とハイと頂かれたのは御開山聖人一人てある。如來の御代官と云ふ事、も今自分の云ふ事は親鸞が云ふのてはないぞ、如來の御代官として佛の仰せどほりを信じた計り、丁稚の如く如來の御仰のまゝを御使ひした斗りぢや。

更に親鸞珍らしき法をもひろめず、如來の敎法をわれも

信じ、又人にも敎へきかしむるばかりなり。

此御言葉を戴けば御開山御出世あればこそ、我等は救はれたのである。法然上人の仰せても、頂かれぬ譯はないが、御開山聖人はハイと戴く小供の一人代表者となつて此樣に見せて下されたのである。

忝じけなくも我が御身にひきかけて、われらが身の罪惡の深きほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり」

此樣な親鸞が此樣に戴かして貰ふのである。代官も〳〵御慈悲の儘を頂く姿である。即ち聖德太子の大乘佛法のありさまを戴いて見せて下されたのである。

建長二年二月九日の夜寅の時、聖人夢想の告まじましき。

聖德太子親鸞聖人を禮し奉つて曰く、敬禮大士阿彌陀佛、

爲妙敎流通來生者五濁惡時惡世界中決定速得無上覺也

此度は聖德太子が聖人を禮し奉つて阿彌陀佛を敬禮し奉る。阿彌陀佛が妙敎を流通せん爲に御出まし下されたのであると聖人を敬はれたのである。此聖人の御出世により我々が無上覺の悟を頂かして貰ふ事を示して下されたのである。此廣大な御恩を戴く事は實に御開山聖人御出世の御恩である。我等が五濁惡世に於て斯の如く喜こばせて貰ふことは實にありがたい。全く御開山聖人の御蔭である。御開山は唯一人の如來の御代官である。此御慈悲を頂けば何から何まで皆御慈悲斗りである。當り前には助かるべきねうちなきものが助かり、此樣に食ひ此樣に着るねうちなき者が着たり食ふたり出來、又私の樣に話をする價値なき者が話をさせて貰ふ。此如く皆特別の御慈悲にあづからしていたゝいて居る。御見捨なき如來の廣大な思召の惠の下に御恩を喜ばして貰ふ上は、たゞ御恩報謝斗りである。重荷を持ちて居る上は、其の荷を如何かせにやならぬ。けれども何も無き身は只御恩を喜ぶ斗りである。

如來大悲の恩德は、　身を粉にしても報ずべし、

師主智識の恩德も、　骨を碎きても謝すべし。

如何なる日暮し、如何なる境遇、たゞ佛恩を喜ぶ斗りである。此廣大な御めぐみに向ひ喜ぶ斗りである。唯々南無阿彌陀佛〳〵と此廣大な御惠を喜ぶ斗りである。

佛慧功德をほめしめて、　十方の有緣にきかしめん、

信心すでにえんひとは、　つねに佛恩報ずべし。

たゞ此御恩を知らせる斗りに種々御苦勞下された故、信心を既に得し人は常に佛恩を報ぜよと云ふのである。政治てあれ、實行てあれ、聖人が袈裟をかけて食はれた樣に、人皆此御恩を知れかし、佛法世に廣まれかしの思より、日々御恩を喜びつゝ日暮させていたゞく斗りである。世界は悉く南無阿彌陀佛てあるゝ此の如く佛恩喜ぶ感謝の生活が、御信心の日暮てある。どれだけ申した處がきりはありません。南無阿彌陀佛。

一、蓮如上人仰せられ候。彌陀の光明はたとへばぬれたる物をほすに、うへよりひて下までひることくなる事なり。是は日の力なり。決定心のおこるはこれ則ち他力の御所作なり。罪障は悉く彌陀の御けしあることなるよし仰せられ候と云々。

一、信心治定の人は誰によらず、まづみればすなはちたうとくなり候。是その人のたうときにあらず、佛智をえらるゝがゆへなれば、いよ〳〵佛智のありがたきほどを存ずべきことなりと云々。

《蓮如上人御一代聞書》

聖傳

ジヤータカ釋尊傳

第卅六　埋れる金

「おもへよ、黃金の塊は」云々此話は世尊ジエタバナに於て舍利弗の弟子なる僧に就きて語り給ひしところなり。

彼は言語穩かに柔かくして長老にも大に敬虔して事へたり。一日長老は世尊の御許を辭して行脚に出て立ちぬ。處はマガタ國の南方なる山國なりき。彼等の一行が目的の地に達せしより此方、前記の僧は何時して憍慢になりて、長老の意に遵はず、何事をか命ぜられし時は長老に對し怒るほどに成りたり。

長老は此事をいと審しくおもひしが、彼等行脚を終へて僧院に歸りしに彼僧は又いつしか前の如くになりき。長老は世尊に此次第を申して曰く、

「主よ、我が弟子中に如此き僧あり、彼は一處に於ては數百金もて購ひし奴隸の如く、又一處に於ては反對に傲慢になり、命に從はざるは何故ならん」と

時に世尊曰はく「舍利弗よ今世のみならず、彼僧は前世亦如此し、彼は或處に於ては奴隸の如く、又他の處に於ては、荒々しく、傲慢になれり」とて次の譚を說き給ひぬ。

若、ブラマダツタベナレスに統治せし時、菩薩は地主なりき、彼は同じく地主にして年おいたる友をもちぬ。其妻はいと若くして一人の息子ありき。彼地主はおもへらく「我妻は若ければ我死後に於て他に夫を持ち我が貯へし金を濫りに使ひ果さん恐れあり。いて地の下深く金を隱しおかんこそ、安からめ」と

やがて彼は奴隸のナンダと呼べるを連れて森に入り、これに命じて金を埋め終りぬ。彼はナンダを戒めて曰く、「我よきナンダよ我無き後は、汝我息子をして寶の在處を知らしめ、此森を人手に渡しめざれよ」、と

程なくして彼は死しぬ。時に息子は年頃になりたり、彼の母は曰く、「我子よ汝の父は嘗て、ナンダを伴ひ、森に金を埋め汝はそを取り來りて財產の整理をなさゞるべからず。」と

一日息子はナンダを呼びて曰く、「我父の埋めし金は何處にありや」と

「森に於て、君よ」

「いざ共に來れ」とて鍬と袋とを彼に持たしめ共に寶のあるあたりへ行きぬ。

「いざ寶は何處にありやナンダよ」と彼は問ひぬ。

されどナンダは其處に立ちて忽ち憍慢に、彼の若き主人をば罵詈して曰く。「汝僕よ、汝奴隸の娘の子の、いざ何處より汝は寶を取り得るや」と

若き主は毫も此罵詈に耳を傾けずして再び奴隸をつれて家へかへりぬ。二三日の後彼は又ナンダを伴ひて來りぬされど奴隸はなほ彼を罵りて止まず。若者は是に烈しき言を返さず、

して歸り來りしがつく〳〵思ふ樣、

此奴隷は最初は全く寶を取り出さんと欲して彼處へ行くらし、然るに彼處へ達するや否や彼かくの如く傲慢になるは如何にも不思議なり、我父の友たる地主に行きてこれを問かばやいと

かくして彼は菩薩の許に行き總てを打明けて如何に爲すべきやを問ひぬ。

時に菩薩曰く「ナンダが傲慢になる其場所に汝の父の金は埋れるなるべし。されば彼が汝を罵詈せば、忽ち叱すべし。「汝は誰に語るか」と彼を打倒し、鍬を取りて、其處を堀り寶を取り出し、之を彼に擔がしめて家へ歸らるべし」と。

おもへよこがねの塊は
ひくき生れのナンダなる
奴隷が虛榮の心より
雷のごとく罵詈をなす、

其處にぞ埋れる。

若き地主は菩薩を辭して家へかへり、ナンダを連れて森に入り、菩薩の命じたりし如く爲して寶を取り出し、財産を整理したり、以後も總て菩薩の忠言により施物をなし、又他の善行をなして生をへたりといふ。

師は此語をおはりて前世の因緣を語りて曰く、

其時のナンダは舍利弗の弟子にして賢こき地主は我なりきと。

第卅七　恐ろしき地獄

「地獄へ行くこそまさるらめ」云々とは世尊ジエタバナに於て、アナータピンジカに就きて語り給ひぬ、

アナータピンジカは佛法を信仰して、僧院の爲に五千四百萬の金を使ひ果しぬ、彼は財を殘さん心毫もなく、唯三寶のみを貯へ、日又日朝、晝、夕の三大禮拜に參詣したり、

其他彼は間にある禮拜にも參詣したり。彼は此等に行く時、空手にて行くこと能はざりき。何となれば若者等は常に彼が何を持ちて行くかを見んとするなり、彼朝赴むく時は粥を持ち行き、晝は牛酪、乾酪、蜂蜜、糖蜜等の如きもの、夕は香物、花輪、衣服等を供へぬ。此如く、日々捧げて、其高は無量となりき。商人等亦彼に證書を入れて、千八百萬に到るまても金を借用したり。又他の千八百萬は河の堤に埋め置きしに嵐の爲に其堤碎けて皆海へ洗はれ、輝ける壺は金のあるまゝに積み重なりて大洋の底深く沈みぬ、

又彼の家に於ては五百の僧侶を供養せんが爲に常に是に要する、米を用意せり、されば、此大商の家は法にとりては四道の集點に堀りし池の如く又彼は父か母の如き位置にありき。此事柄の爲に、貴き佛陀御自ら此大商の家を問ひ給ふ事珍らしからず、八十餘人の主なる御弟子も亦然りき、其他常に往復を斷へざる僧侶無數なりき。

彼の家は七階にして七の門より、其上には間を明けたる塔あり、其第四の塔に異敎者なる妖精住みぬ、貴き佛陀の此家へ入り給ふ時はさすがに彼女も上には止まりかねて、其子供と共に階を下りぬ。其の如く八十人の御弟子其他の僧等の時も下りぬ。

彼女思ふ樣、「此比丘等が家へ來る上は安き思なし、我は常に階を上下する事能はず、いて彼等の來らぬ工夫もがなと

一日主なる番頭休みし時彼女は容を現して彼の前に立ちぬ。

「其處に立てるは誰ぞや」と彼は問ひぬ。「我、第四の塔に住める妖精なり」と答へぬ。「何の爲に此處へ來りしや」

「汝は商人の上を案ぜず、彼はおのが終りの日をおもはず、皆金を取り出して比丘瞿曇の懷を肥せり、彼は些かも事業を企てず、仕事をなさず、されば汝よく商人に彼の業務を勵む樣に話し、かつ、瞿曇及び其弟子も、もはや來らぬ樣になすべし」。と

されど番頭は云ひぬ。「あはれ愚かなる妖精よ、商人は救濟に導く佛陀の敎の爲に彼の金を費すなり、例へ我は頭の髮を捕へられ、奴隷に賣らるともかゝる事は云ふまじ、とく去れ！」と

他日妖精は又商人の子息の處へ行き同じ樣に說きぬ。されど彼亦前の如く之を退ぞけぬ。されど妖精は商人へのみは敢て語らざりき」。

商人は斷へず施物を爲して、業を爲さゞるが爲に、彼の利は愈々少なく、彼の財産もやうやく衰微しぬ。かくて愈々貧に迫まり行けば、彼の家具彼の衣服、彼の食物等もありし昔の如くにはあらずなりぬ。これにもかゝはらずして彼はなほ法に施物を捧げぬ。されどもはや最良のものは施す能はざりき。

一日彼は師を禮し奉りて、座に着きし時、師は彼に向ひて、「やよ家長よ、汝の家に於てなほ施物ありや」と問ひ給ひぬ。

「施物はなほ捧ぐべし、されど、それは皆味無き古びたるものゝみ、粥も昨日のものなり」と答へ奉れり。

世尊宣く、「汝心を煩はす勿れ、家長よ汝は唯味はふべく不快なるものを供するのみ、若し心だに正しからば、誠に正しき施物と云べし、如何となれば、其効果いと大なればなり、心淸淨なる者は施物も亦淸淨なりと次の偈にあり。

誠の心だにあらば
無限の佛や弟子たちに
粗末の施物なすあらじ
汝たゞ果のくるみれば
鹽なき干せし粥とても
佛に無禮とならぬなり。

再び佛は宣へり、「家長よ汝の捧ぐる施物は貧しくとも、汝は八人の貴き靈に供するなり、我嘗てヴェラーマたりし時全印度を搜し求めて得たし七寶を施さんとて恰かも五大川が一の大池となりし如くの大施物を爲せり、而かも我其時三寶に歸依せず、五戒を持せざりしかば、何の果も得ざりき、されば汝の施物は貧しくとも、心を惱ます勿れ、とてヴェラーミカ經を說き給へり。

先に商人に語るを躊躇せし妖精は思へらく、彼は大に貧窮に迫れり、今こそ彼は我言に耳を傾けん」とて夜中彼の部屋に行き、容を現はしぬ。商人は彼女をみて曰ひぬ、「其處に立つは誰ぞや」と、「それは第四の塔に住める妖精なり」、「汝は何の爲に此處に來りしや」、「我は汝に些か忠告せんとて來りぬ」「されば語れ」「オヽ大商よ、汝は後の謀をなさず、汝は汝の息子

息女を顧ず、瞿曇の敎の爲に多くの富を濫用せり、徒らに金を永き間費して新らしき業を起さゞれば、汝は瞿曇の爲に全く貧困となれり、然るに汝はなほ彼を免れんとせず、比丘等は今日に到るまで、汝の家に群り來れり、而して汝の失なひし物は再びかへりこず、されば汝は爾今以後再び僧院（足踏みせざれ、又比丘等をも入るゝ勿れ、又比丘をみんとて振り返るだに避けよ、而してたゞ專心汝自身の業務を勵み、汝自身の貨物を整へ汝の家の爲を計るべし」。と

時に商人は云ひぬ、「此は汝が我に與へし忠言なりや」と

「然り其の如し」

無限の智慧なる佛陀は我をして、汝の如き靈物の百或は千或は百千にすらも動かされぬ樣にしたまへり。我信心はシネルの大岳の如く確固に住す、我は救濟に導びき給ふ宗敎の寶の爲に我富を費しぬ。汝の言は惡し、其は汝の如き無情なる惡鬼の佛陀の敎に與ふる一の礫なり、我は汝の如き者と一の家に住む事能はず、何處へなりと行け！」と叱しぬ

彼女は信仰ある聖なる弟子の言葉を聞き敢て止まる能はずおのが住家より子供等を片手にかゝへ、何處へか行きぬ。されど彼女は若し他によき住家を見出す能はざれば、商人に宥免を乞ひて再び其處に歸らんと決心せり。かくて彼女は市の守護神の許に到り、彼を禮して恭しく立ちぬ。

「汝は何の爲に此處へ來りしぞ」と彼は曰ひぬ。

「君よ我は思慮なくアナータピンジカに忠告せしに、彼我を怒りて、我住める處より追ひ出しぬ。願はくば我を伴ひて彼に宥を乞ひ給へ、而して再びもとの住家へ歸らしめよ」と

「汝の彼に云ひしは何事ぞや」

「そは爾今以後佛陀及び僧等に飯食を與へず、瞿曇比丘に彼の家へ入るを得しめざれと云ひぬ」、

「汝は惡しき事を云ひしものかな、そは敎に打擊を與へしものなり、我は汝と共に商人に行く事能はず」

彼より助を得られずして、彼女は世界の守護神なる四人の天使長のもとへゆきぬ。彼女は又も以前の如く彼等に拒まれしかば、遂に神の主なるサッカのもとへすがり、總てを訴へていと熱心に願ひぬ。「あはれ神よ、我れ住家を集はれ、隱家なくして子等の手をひき流浪せり、君の御惠をもて何處なりと我住むべき處を與へたまへ」。

彼亦彼女に曰く「汝は惡しき事をせり、汝は勝利者の敎に仇をなしぬ、我は商人に汝の行に於て免を乞ふ能はざるなり、されど我はこれにより商人が汝宥免する一策を授くべし」。

「あはれ神よ、我に其を語り給へ

或人々嘗て商人に證書を與へ、千八百萬の金を借用したりし事あり、されば汝は彼の番頭の姿をもて、何人にも語らずに此等の書類を持ち、周圍には多くの小鬼を從へ、彼等の家へ行くべし、片手には證書をもち、片手には受取書を携へ家の中央に立ち汝は妖精の力もて彼等を驚かして云へ、「こは汝の借用書の書附なり、我等の商人過ぎし日は汝に何も云はざりしかど、今はいと貧窮に落ちたり、汝が彼より借りし金員悉く仕拂へ」とかくして汝妖精の力もて總て此等數千金を取返し、之を商人の空なる寶藏へ納むべし。又商人には他に埋れる寶あり、そは、アシラヴァチ河の堤に於て埋めおきしも

のなるが、之は嘗て堤防破れて海へと洗はれぬ。そを汝の力もて取り出し彼の寶藏へ入るべし。又かく〳〵の處には亦千八百萬の金あり、そは所有者なきものなれば、之をも持ち來りて、空虛なる寶藏を滿すべし、汝かくの如く彼の空なる藏を五十四千萬の黃金もて滿たす罰を行なひ終りし時汝は商人に行きて宥免を乞ふべし」と

「よし我神よ、と彼女は云ひぬ、而して彼のいはれしが儘に、敎へられし通り總ての金を持ち來りぬ。中夜又彼女は商人の寢室に行きて、形を顯じぬ。

「其處なるは誰ぞや」と彼は曰ひぬ。

「そは我なり大商よ、汝の第四の門の小塔に住みし、盲目の愚かなる妖精なり、我大なる深き愚鈍より佛陀の切德を知らずして汝に何事をか申しぬ、されば其咎を宥されんとて此處へは來りしなり。我は遂に神の王なるサッカより五千四百萬の金もて汝の藏を滿たすべき罰をうけぬ、其金は即ち汝が嘗て人に貸したりしもの、千八百萬、汝が海にさらわれしもの千八百萬、他はかく〳〵の處にありし持主なき千八百萬の金なり、汝がジェタバナに於て僧院の爲に費せし金は悉く歸り來りぬ。我若し永く住處をゆるされざればいと不幸なる狀態にあり。願はくば我不明の爲になせし事を心にかけざれ、あはれ大商よ宥し給へよ」と

彼女の言をきゝて、アナータピンジカは思ふ樣「彼女は神の類なり、彼女は罰に服して之を行ひ終り、彼女の罪を懺悔せり、世尊は是を思慮したまひ、又彼女は世尊の全き德を知るべし、我は彼女を世尊のみもとへ連れ行かん」とて彼は妖精に曰ひぬ。「よき妖精よ、若し汝我に宥を得んと欲せば、世尊の御前に於て問ふべし」、と

「甚だよし、我は然なすべし、我を世尊の御前に連れ行き給へ」かくて夜明けし時、彼は彼女を伴ひて朝まだき、世尊の御前へ行き彼女のなせし事をば悉く告げ奉りぬ。

世尊之を聞き給ひて宣はく、汝見ずや、ォゝ家長よ、如何に罪人は罪の果が熟さざる中はそを快とするかを、されど其果熟せし時、彼は其業を罪なりと知る、又其如く善人は彼の善行を果の實らぬまでは罪なりと見る、されど其實熟せし時は、彼始めて其業が善事たるを知る」、とて世尊はは次の二つの偈を唱したまへり」。

其果熟さぬうちはなほ、
罪人罪を善しとみる、
されど罪の果熟し來て、
始めて罪を悟るなり、
其果熟さぬうちはなほ、
善人善を罪とみる、
されど善果の實り來て、
始めて善と悟るなり、

此偈の終りに於て妖精は信の果を得たり、彼女は佛の千輻輪の御足に體を投じて曰く、我が主よ、貪欲なる、地獄へ行くべき、盲目の我なりし、我は世尊をば知らずして惡樣に語りぬ、汝の宥免を垂れたまへ」と

如此くして彼女は世尊及び、商人の免を得たり、

其時アナータピンジカは世尊の御前に於て己が功德を讃じ

て曰く、「世尊よ、此妖精が我に佛陀を養ひ奉らざる樣戒めしも彼女は我を止むる能はざりき、例へ施物を爲す事を禁ぜしも我は是を敢てしき、こは我功德として數ふべきや」と

「汝家長よ、汝は信仰を獲たる人なり、正しき弟子の一人なり、汝の信仰は堅く、かつ第一の果を步める人の聰明なる智識を有す、汝が此弱き妖精の言に動かされざりしは驚くに足らざるなり、嘗て、いまだ佛世に出興したまはず智識勝れざりし時、一人の賢者ありき、彼は欲界の大魔王なるマーラが空中に現はれて、施物を爲さゞれと云ひて深さ八十キュビットの焦熱地獄を見しめ、若し施物を與ふれば、此地獄に落すべしと赫せしも、なほ是を止まざりき」、と戒しめ給ひぬ。

アナータピンジカ佛に此譚を語り給はん事を乞ひ奉れり。

今は昔、ブラマダッタベナレスに統べし時、菩薩はベナレスの財產家の家族に生れ給ひぬ。彼は恰かも王子の如く贅を極めて育てられぬ。彼は年頃に到るまでいと穩かに養育され十六歲の頃には早や總ての智識に通達したり。

彼の父の死後彼は財務者の後を襲ひ六棟の施物倉を建てぬ、四棟は四の門に於て、一棟は市の中央に於て、一は彼の邸宅の入口に於て建てぬ。而して彼は施物を與へ、戒を持ち安息日を守りぬ。

一日山海の珍味菩薩の朝食の爲に並べられしが、折しもパッセカ佛七日の禪定より起きたまひぬ。彼の爲に食を求むべく來りたまひぬ。而して彼はベナレスの財務者の家に行かんと思ひつゝ、顏をナノタッタ湖の水にて洗ひ、荊棘の揚枝を用ひマノシラ山の平地に立ちて下衣を着し帶をしめ、上衣を纏ひ、鐵鉢をとりて空中を步みて恰かも朝食の時先の富者の門に立ちたまひぬ。

菩薩彼を見奉るや否や座より立ち、食事の用意を爲せる僕を見たり」、

「何をか爲すべき主よ」と彼は問きぬ。

「彼紳士の食鉢を持ち來れ」と主人は曰ひぬ。

其時大惡なるマーラは大に怒りて、現れ出てゝ曰く、「ペッセカ佛が食を取りしより恰かも七日を經たり、若し今日彼食を取らずば、彼は死せん、我は此奴を滅さては止まじ、いて財務者の施物を止めん」とて彼は直ちに焦熱地獄を家の中に現じぬ。其中に燃ゆるものは悉くアカシア村の炭なりき。其炎盛に燃ゆる樣はアヴシの大獄の如くなりき。かくして彼は空中に止まりぬ。

食鉢を取らんとて來りし僕は是を見て大に恐怖して止まりぬ。

「汝は何故止まるや僕よ」と菩薩は問ひぬ。

「家の中に焰を吐きて燃え上る焦熱地獄あり、君よ、人皆を怖れて逃げ去れり」。

時に彼おもへらく、「ヴェサヴァッチマーラが我施物を爲すを妨げんとてかくの如く爲せしなるべし、されど我は數千のマーラに妨げらるゝとも何の憚なし、今日我は麗の力が勝つか我の力勝るかを見るべし」。

而して彼は自ら米飯の皿を取り火の地獄の端に立ち空を眺め、マーラを見て曰く

「汝は誰ぞや」

「我はマーラなり」と答へぬ。

「焦熱地獄を作りしは汝なりや」

「然り我なり」

「何の爲に作りしや」

「唯汝の布施を妨んとて、又パッセカ佛を殺さんが爲に作りしのみ」、

「されど我は何れもゆるさじ、今日こそ汝と我の力を試むべし」、となほも地獄の端に立ちて叫びて曰く、

我主ペッセカ佛よ我若し此燃ゆる火の地獄へ落ちなば再び歸り來らじ、願はくば、我手に捧ぐる食を受け給へとて次の偈を唱へぬ。

價値なき業をなすよりも
頭は下に足上に
地獄へ行くこそまさるらめ、
佛よ施物を受けたまへ、

かく曰ひて彼い確と皿を握りて怖ろしき地獄の火炎の中へと踏み入りぬ。

此刹那に麗はしき大なる蓮華其怖ろしき地獄の底より上へ上へと生じ、菩薩の足を受けぬ。而して其中より大聖の頭の上へ一摘の花粉飛び來り、彼の全身を掩ひぬ。北蓮華の中に座して彼はペセッカ佛の鉢の中へ食を注ぎぬ。

佛はこれを取り、感謝して鉢を高く投げぬ、而して彼自らは天空に上り、總ての人の見るまに、恰かも雲の種々の形に靉くが如くヒマラヤの山多き國へ還り給ひぬ。

マーラ亦彼の敗北を悲しみて己が住家へ歸りぬ。

菩薩はなほも蓮華に座して人々に慈善と正義の讃嘆をなして法を說き、やがて人々に圍繞されつゝ家にかへりぬ。彼は布施其他の善行をなし、長壽を經たりと云ふ。

師は此說敎の終りに因緣を結びて曰く、「ペッセカ佛死し給ひて其後は新らしき靈彼の後を繼がざりき。されど彼に布施して誘惑者に打勝ちし人は我の前生なりし」と。

行誡上人

七十になりける年のくれに
かれてより身のおろかさは古も稀なるものかとしばかりかは。
老せじと思ひこしぢのしら雪もかしらのものとなりにける哉。
年ごとにかしらの雪はつもれどもおいせぬものは心なりけり。
のくれに
一年は名のみなりけり大御代をてらす日影のはてしなければ。

雜錄

近時思想界と信仰問題

近頃の思想界を見ますると大體二つの傾向があるかの樣に思はれるのであります、其の二つの傾向は何んであるかと云ふに、一つは何事も着實健全なる實行を先きにして進むと云ふ風であつて譬へば慈善事業であるとか感化事業であるとか云ふ工合に諸方面に向つて實行を鼓舞するのであります、思想と云ふ者の實は實行に傾くのであります、一方は內心の思想の囚れざる眞に達せんとするものである、廣く云ふたならば自然主義も其であろうが眞面目の意味の自然主義と云ふならばよかろう即人が或る一つの者に捕はれずして在りのまゝなる眞實の有樣を以て行ひたいと云ふ所の思想であります。

若し此二つの思想を名づけ得るとしたならば前の思想は之を律法的思想とでも申しませうか、後の思想は自由思想であると云ふ事が出來るのであります、此二つの傾向を持つて居る思潮は各々の部門に分れ各方面に溢れて居るのであります、大に云へば政治上にもあれ、敎育上にも乃至宗敎上にも此二傾向が歴然として顯はれて居るのであります、此思潮に對しまして之を信仰の立場からして批評して見たいと思ひます

先づ前者より批評して見ますれば所謂一つの律法の下に眞實なる實行をなし修養をすると云ふことは害のない事であります、人世に於きましてやり損じのないことであります、人が道德的に大に修養すと云はんも、一つのことを訓練せんと云はんも又個人的に修養實行するのも皆害なくして誠に喜ぶべき傾向でありますが、之を信仰の立場からして批評して見ますれば前に申した樣なことは相待的律法の下にくゝらるものであつて未だ信仰の第一義、眞諦の光を見るに到らぬのであります、宗敎上て言へば敎權主義の如きものである此の點よりいたしますと斯の如き律法主義を以て實行であるとか修養などを叫ぶが未だ眞實の信仰の光を得て居らない、此の傾向は今一段人世に衝き當りて見ねばならぬ、然して初めて信仰の光に到達する事が出來るのである、若し信仰の光明に到達する順序として考へて見たならば此實行主義では信仰に立つ者に非ずして人世の思想を律法的相待的にくゝる者て眞實の光明を見た者てない、之を以て自己が絶待的の眞實の光明に依り實行し修養して居るとせば、即ち之を以て究竟の地に到達せる者とせば大なる誤りてある、此の誤れる究竟の者を以て相對的律法的に試みて居つたならば遂には信仰の成立なき爲めに恰も根柢なき沙上に城廓の築くと均しく一度蹶きて絶待的眞實の光明に浴せんとして再來す可き運命を持つて居るのである。殊に一言す可きは此の樣な氣風思想は此兩三年の間盛になつて來たのであるが、或者は此奮鬪的實行より眞實人世に衝き當つて煩悶であるとか悲觀となつて苦む者が多いのである。此實行上の問題から漸々世間一般の人が信仰問題に到らんとの氣風があります、或者は既に此問題に觸れて

居る者もあるが、現今の修養或は實行と叫ぶ所の者は未だ相對的であつて絶待的眞實の光明に到らぬのであるが如何しても是れは絶待的に到らざる可からざる者である。此の絶待的眞實の光明、即ち信仰の立場は夫々宗祖の宗風に依りて存するのであるが一たび信心開發すれば、不思議なる哉人世の何れに在つても皆私の力てなくして眞實信仰の惠を見出し得るのである、玆に初めて眞諦第一義に到達するのである。

第二の思想に就きましても同樣な批評が出來ることゝ思ひます。前に申したのは相待の見地故、之から眞實絶待に到らざる可からざる者である。後の第二の思潮は一概には申されませぬが、文藝は勿論宗敎上にも信仰とか悟道門とか喧しい、皆各々何者かの絶對の見地を得て居る樣に申し之を以て世に處せんとして居る自由なる立場であるが、其實甚だ怪しい者であります、文藝上其の他禪であるとか他力的にせよ信仰とか悟りとか云ふのが頗る怪しいのである、信仰や悟りの狀態が果して眞實の光明なるや否や怪しい事であります私の下に來た一來道者が穩老禪師を訪ふて老禪師に私は天地宇宙一體であると思ふて居りますが如何ですかと問ひますと老禪師が言下に思ふて居るだけ惡いと申されたと云ふて話しましたが私しは之を聽いて流石は老禪師のお言葉であると深く感じました、自分が自己の內に得た考て思ふて居るだけ主觀的に自己の作つた者てある。他力的にしても如來が私をお助け下さると思ふて居つたのみにては未だ眞實の光明が見へぬのてある。此眞實の光明を見ずして人世に押出して此を以て人世に力を及さんとするのてあるが、何等の力もないのてある、斯の如き根本の見地が絶待にならざれば其より表はるゝ自然の思想が人世に於て眞實の力を持ち來さないのは當然てある、宗敎てすら主觀主義は既に此狀態てありますからして文藝に於ても眞人生に達せぬは勿論の事である。自然主義の思想の如きは眞の光明を見ずして自分氣儘に自然に動んとするものなるを以て其の結果たるや暗黑てある。前者は相待的律法の下に戰鬪せるものてあつて後者は一見地よりして在りのまゝに行んとする思想てあるてある。てあるからして前者は相待的よりして未だ眞實絶待に至らぬ者て後者は眞實絶待的の光明非ざる者が、眞實絶待的のものてあるかの如く誤れるものてある。由是觀之現今の思想中には眞諦の第一義、眞實の光明が思想界中に現はれないのてある。或者は相待的律法的の狀態に在り、或者は誤れる眞諦の光明を眺めて居るのてある、何れも共に眞諦の第一義の光明に到達す可きものてある。若し此處に到達せなかつたなれば前者は窮窟となり煩悶となり悲觀となつて相待的律法的の暗黑なる思想の中に覆はれて終るのてあります。後者は墮落に陷り、荒怠に流れ氣儘自由の自然主義となりて極に達するのてある、故に此の二つの傾向を持つて居る今の思想界は深刻なる人世に接觸し衝突して如何しても此の眞諦第一義の光明に到達す可き運命を有して居るのてあります。

斯の如き狀態てありまするからして宗敎家の任務として一般の思想を此の眞諦第一義の光明、絶待的の見地に導かねばなりませむ。此の任務は單に思想界を導くのみてなく政治界實業界は云ふに及ばず社會の全體を導かねばならぬ。現代以

上の絶對信仰の見地を與ふるに盡さねばならぬ宗教にして只現代の思想に適合する樣に、又現今の思想に追從するが如き態度に在りましては宗教の生命は無いのであります。換言せば宗教を現實の實行舞臺の機關に見、現今思想界の一問題たる文藝の思想と調和して以て得たりとするは宗教の本領を沒却するのであります。宗教從來の傾向を見るのに世間に雷同し世間に追從する傾きがあるが斯樣の狀態では世間を導くことは出來ない、政治、實業、教育其の他世間の思想に迎合せらるゝ樣に適合せらるゝ樣に作り變へたなれば宗教其の者が彼等に力を與ふるに非すして彼等に屈從したのである。相待的律法的の上に立てる實行は眞實な者ではないぞ、自然主義の自由は眞の自由でないぞよ、と云ふことを忌憚なく示して此の以上の光明を示し得て即ち世間を超越して初めて世間を救濟し得るのである。

近時佛教家が世間の方に宗教をば合する樣に說く者のみであつて以上の點に氣が付かぬのが多い、眞諦第一義を提げて一世を風化せんとする者が少ないのである、之れに專注盡力する者がないのであるからして世人も宗教に求むるに自己の思想に合するを望まずして自己に一つ光明を與へられんことを望まなければならぬ。宗教を機關に思ふてはならぬ、有眼の士の自己の可能のみなるものゝみを求めずして自己の立脚地以上の者を求めねばならぬ。其の世間以上の者即ち眞實の光明が世間に働かねば好ましい者ではない、人世を超越せる眞實なる光りであるなれば必ず世間思想の上に活躍す可きものである。

斯く云ふとも世俗を離れて山林に念佛せよと云ふに非ずして世間以上の立脚地を得て然して行へ、其の得たる立脚地にして絕待的眞諦第一義の光明であつたなれば必ず人生上に活躍するものである。若し活躍せぬ者であるなれば眞諦第一義の光りでない證據である。相待を超越するを以て相待を救ひ相待を濟度することが出來るのである。

以上は珍らしきことならざるもので信仰であるとか悟りと云ふことは常套語であるが滔々として敎權的主觀的に流るゝを以て今は絕對的眞信仰、眞解脫の見地より近時思想界に一言の批評を下して自己の本領に着眼せざる可からざることを一言した次第であります。（和融誌近角）

行誡上人

歳暮

いつしかと今年も暮れぬ今年はおもひしこともいたづらにして。

歳暮興

松たてし門なし見れば春めきてとしの暮ともおもはざりけり。

ひつじの年の暮に

としの名のひつじのあゆみ急がれどほやも近づく年のくれ哉。

徹底せざる人生觀

世間一般の人生に對する見樣を見ると、何でも世の中は苦だ、一點の光明も無いといふ樣に悲しんで居る所謂厭世的な見樣と、世の中を唯うか〳〵と樂んで居る所謂樂天法、快樂的な見樣と二ツある。まあ種々の人もあるが、大きく別けていへば、此の二ツになる。殊に近頃は大層厭世的な人生觀が流行つて來て、ちよつと沈痛なものゝやうにも考へられるのであるが、私から此れを批評すると、所謂厭世とか樂觀とかいふは共にまだ人生の眞を看ておるものでは無いのである。人生の眞の光景は苦も快も、厭世も樂天も超絕せねば出て來ない。かういふと何か徒に言を高尙にするやうにも聞えるのであるが、さうでは無い。こゝは注意を要する處なので、私が始終言ふ實驗の味である。實驗して味つて來ないと、ここは解らない。空な談理に流れて了ふ。佛教といふ物は此の世人の苦樂以上の境界を實驗して出て來たものである。佛陀の教といふものは、これ以外に無いのであるが、それが後にはまた化石して唯の理窟になつて了つたまたりは世俗の苦樂觀と同じものに墮ちて了つた。

今、世の厭世または樂天といふ思想を批評してみるならば、

厭世觀

とは何ういふ事を意味してるかといふに、一言にしていへば、世の中が思ふ樣にならぬといふ事である、世間といふものは自分につらく當るものである、惡く作られてるものであるといつて、悲しみ、歎く、これが今の厭世悲觀である。併し、なほ此の考を根柢まで批評し去つてみれば、それならば彼等の心持は眞に思ふやうにならぬと覺悟が出來たのかといへば、覺悟が出來てるのぢや無い。其の實は、物質的にか精神的にか、何か欲する處があつて、其れを滿足したい、何うかして滿足する事は出來ぬかなあと、望みをかけつゝ泣き事をいつてるのである。世の中は斯ういふものだ、惡ばかりて作られてるもので、滿足は得られぬものだと眞底から覺悟してゐるのでは無い。同情が無いやうてあるが、批評すれば所謂厭世觀といふ者は斯ういふ者である。然らば

樂天觀

の方は何うかといふに、これも唯世の中の快樂を追求して歩くにすぎないから、眞實の平安は得られない。何か身に變動が起れば忽ち其の樂しさも打ち壞されて了ふ。厭世觀が悲しむべからざるを無暗に悲しんで泣いておるのと同樣に、樂天觀といふのは樂しむべからざるを樂しんておるもので、まことに危い。いつ其れが崩れて、却つてまた極端な悲觀に陷るやうな事が起らぬとも限らぬ。

悲觀、樂觀、形は變れど其の根柢は同じもの

である。安住を得やうと欲して、共に其の安住を此の相對界に期待しておるものである。其れ以上には出てゝおらない、徹底しない人生觀である。

斯く言ふと、偏に物質的な物についてのみ悲觀樂觀があるやうであるが、世の人が大層大切なものとする道義の問題でも人格の問題でも結局同じである。理想を高く持ち、其れを實現しやうとする。併し人間の力は知れたものである。幾ら立派な理想を立つた處て、なか〳〵其れを現世に實現する事は出來るものでない。實現し得られなければ失望する。物質的の慾を滿足し得ずして厭世に陷るのと少しも變らない。平重盛は忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならずとて道義的に悲觀して死んだ。人間として立派て無いとはいはぬが、清盛が榮華を求め〳〵て終に悲觀し心身を亡すに至つたと結果は同じてある。眞正の人生觀を見出して眞に安住を得やうとするには何うしても人生以上に光を見出して來なければならぬ。

以上は世の人生觀に對する批評てあるが、佛敎て諸法は無我とか、無常とか、空だとか、苦だとか說くのを聞いて、直ちにこれを厭世的泣き事に考へる者がある。佛敎者自身にさへ時々斯んなに思つてる人があるやうてあるが、それては全く世の厭世觀と違つたものでなくなつて了ふ。佛陀の敎といふものては無い。世の中を常住てあれかしと願つて儘ならぬのて、あゝ無情だ無我だと悲しむのてはない。

佛敎の無常無我

とは積極的のものてある。世界は無常てあると悟り、人生は苦てあると分つたのてある、其代りには既に常住平和の光明が輝きてあるのてある。卑近の例ていふならば、赤子がランプを摑まうとする、小刀を摑まうとする。摑むなと側て親がやい〳〵言つても子供は承知しない。泣く。さうして摑んだ爲めにまた怪我をして泣く。これと同樣に功名富貴を當てにすなと云つたからが、當てにしない譯にはゆかぬ。手を切るかも知れぬ、燒くかも知れぬが棄てられないのが、人の常てある。何か其れ以上の物が無ければ駄目てある。小刀を欲しがる赤子にお菓子を遣れば、其のお菓子を取ると共に小刀を離す。茲の味てある。內心至極の太平和境、大歡樂境が與へられる。所謂涅槃てある。

常樂我淨の涅槃

が茲に開けて世の中の名譽や富貴は無常だといふ事が初て解つて來る、佛の說かれた無常無我とは斯うしたもので、消極的な泣き事てはない。一方に此の大層善いものが摑めたので、世の中の事は執着を起さないやうになる。それが無常無我だ。涅槃など云ふと、これも亦滅といふ事てあるから消極的のものゝやうに思はれるが、滅とは苦樂煩惱の滅した事て、其の內容は光明に滿ちた積極境てあるのてある。所謂小乘佛敎といふのは此の佛の眞意が失はれて消極化されたものてあつて大乘とは此の消極化されたのを更に佛陀の本懷に立ち還したものてある。然るに世に或は大乘佛敎の眞如を說くをみて、所謂哲學上の本體論かなどのやうに思ふ人があるらしいが、これは大層な間違ひてあつて

眞如とは佛陀大覺の境界

てある。人生を超絕した境界を實驗し味つた處を指したのてある。

さて普通に厭世とか樂天とかいふのは世の中の功名や富貴に執着する處から起る迷妄てあるが、併し前にも言ふた通り、唯世の中の事に執着すなといふたからが、執着しない譯には行かない。それて佛敎ていふ此の絕對涅槃の境界、即ち人生以上に光を見出して、其の光て世の中の事を照してみなければいけぬ。今日世上の悲觀樂觀はもつと徹底させなければいかぬ。幾ら道德堅固にせうとした處が、此の絕對境から起つて來ず、信念から湧いて來たものてなくては人爲的に修養的に力味て居るのてあるから、遂にくるひが來る。此の絕對の見地に立たなければ眞の人生が見えぬ。從つて始終煩悶し苦しまなければならぬといふ慘めな有樣に居なければならぬ。政治ても實業ても何ても此絕對的見地に達して眞光明の中より總て信ずる處あつて出て來たものてなければ、眞正の政治、眞正な實業とは言へないのてある。（無名通信近角）

告白

是非善惡の分らぬ汝を愍む本願也

岩永法電

私が佛樣の御呼聲を眞に今更の樣に氣付かせて頂いたのは本年十一月初九段第二求道會て近角先生の導きに依つて喜ばせて頂いたのてあります、私は人の樣に無常觀や罪惡觀などに氣付いて難有くなつたのてはなく、まだ其處まて氣付かない中に、我身の無能なるを歎じて、眞に私と云ふ私の價値なきに泣き沈んて、始めて慈悲の御呼聲に氣付かせて頂いたのてあります。

私は生れが寺て育てられたもので、宗學も聊か研究したのものですから。佛樣の御慈悲はどんなもの、他力本願は如何なるものて、何時此世を終りても、未來は間違なく御淨土に參らせて頂く事を有難く思ふて、報恩の御稱名を稱へて喜んて居りました、其時分は今から十二三年前の頃からてありましたが、卅四年支那に參る時などは、母は私の後生を氣使つて、檀家一番の喜ぶ同行て現今京都筑後詰所預りをして居る菊池次作同行の前て、私の安心を調べられました、同行は母に向つて御安心なさい、只今承つた御安心ならば氣使ありま

せんと申したので、愈々支那に行く事を許されました。最初南京の東文學堂に四年職務を取つて居た頃は、忠實であり又信念も尙厚かつた樣に思ひましたが、卅七八戰役に從軍し、卅九年淸國南昌に赴任する事となつた、既に其頃より虛榮に迷ひ初めて、自分の理想を滿足させる爲には、苦痛と煩悶とに身神を包圍せられて居ました、本年一月滿期妻子をつれて一應鄕里に歸る事となりましたが、再び出稼せんとの念が止まなかつたので、歸つてもやはり不平ばかりて、妻を泣かせ親を泣かせ、佛樣を泣かせて居ました。

私は寺の三男に生れたものですから寺を相續する身ではなかつたのですけれども、長男は十六年前死去し、次男は病氣となつたので、私が相續する事になり、檀家から中學だけ勉强させて呉れました、其頃私も重患に罹り、一時は正に地獄に墮ちかゝつて居ましたが、前後三年治療に掛り、幸に全治しました。是れ佛祖の御冥祐と喜び、恰も中興大師四百回忌に際し、報恩の思より諸氏の厚志を仰ぎ、施本を配布させて頂いた事があります。卅四年支那に參りましたから、法の爲め生涯を支那で終る覺悟となり、六男を勉强させて、私の代りに寺の相續者となし、義務を免れて所志を貫徹せんと思つて居ましたが、不幸是亦三年前病死したので、私の爲には大打擊を蒙つたのです、此頃は已に虛榮に迷はされて居ましたから、徒らに此世の儘ならぬ事に愁ひて居ました、こうなつて見ると、どうしても私が相續をなさねばならぬ譯ですが、私は何とかして此責任を逃れたいと明け暮れ案じて居りました、夫が爲め或時は親を泣かせ、或時は佛樣を泣かせました、家庭の事情はやはり私の自由を許しませぬ、去る三月又淸淸したいと思ひ立つて居る時、義父は病氣に罹り、一時快方に趣きましたが、病後非常に健康を害したので、益々渡淸を喜ばぬ樣になりました、檀家のものも亦海外に行く事を嫌ふ樣になりました、私は先きに弟が死んだ爲めに打擊を蒙り、今又義父の病氣に遇ひ絕望するの已むを得ざる事となりました、私は最早仕方がないと思ふて、將來田舍に歸りて布敎する事に決心しました。さて人に布敎するには先づ自身が信仰を得なければ駄目である、自分に物持たなくて人に與へるなどゝは以ての外であると考へましたのが糸口となつたのです。

尙外に著しき家庭問題があります、前に申した樣に寺に歸らぬ積であつたから、總て寺に關係のない樣に將來を計畫して妻帶を致しました、世は實に儘ならぬので、弟が死去したのが原因となつて、家庭にまで風波漸々荒びて來たのです。私は色々平和の道を講じましたけれども更に甲斐がなかつたので常に心配して居りました。

去る七月要事があつたので博多に參りました時、圖らず近角先生の演說を承る御緣に遇ひました、其演說は善惡論と云ふ題で非常に難有く感じたのです、特に『世に處するに甲は甲の物指を以て乙を量り乙は乙の物指を以て甲を量り互に自分勝手の物指を用ゐるから、甲は乙を非なりとし、乙は甲は非なりとし、互に是非善惡を爭ふ樣になる、今兩方の物指を佛の物指に照して見ると、甲亦非なり、乙亦非なり、兩方何れも誤れる事を悟る、そこで共に己れの非を知りて佛に信賴して見れば更に爭ふ事がない』と云ふ處に至りては一言一句が當時煩悶せる私の問題に適切な敎訓でありました、問題とは家庭問題でありますは是が私の信仰に入つた動機であります。

私は愈道を辿らんと思つて去る十月初近角先生を慕ふて東京に參りました、毎週土曜と日曜との講話を熱心に聽聞して居ました、信仰を得たら煩悶せる問題の解決が出來るものと苛つたのですから、一日先生に御尋ねした事があります、『私は家庭の圓滿を計らんと思ふて信仰を得たいものと思ひますが、信仰を得た結果は果して家庭が圓滿になるでありませうか』と、先生は斯く云はれました、『家庭問題や生活問題や其他色々な或目的の爲に信仰を得たいと思ふてもそれは駄目である、何故ならば信仰を得たとて果して、其目的の通りになるや否やは其人々の業法に依つて種々樣々である、中には其目的通りの結果を得られる人もあらうが、中には不結果に終る人もある。信仰を得た人でも此肉體は生涯苦痛を以て終る人もあるから、若し或目的の爲に信仰を求めたら、其目的が豫想通りに運ばなかつた場合には、再び煩悶が起りて、折角求め得た信仰は破壞せられる事がある、だから眞の信仰を得たいと思ふたら、所有問題を打ち捨てゝしまつて、一向に信仰を求めねばならぬ、極樂に參る爲に念佛するも、亦眞の御慈悲を喜ぶのではない』と、懇々と御話に預りました、當時は家庭問題の外尙種々の小問題がありましたが、總べての問題を投げ棄てよとの敎訓を蒙りてから一層煩悶しました、信仰を得たとて其目的が滿足に結果を得られるやどうだか分からぬ樣な事なら、信仰を得る必要はない、從て求道學舍の講話を聽く必要もない、寧ろ田舍に歸りて修養する方が遙かに良策であるとまで考へました、けれども佛樣は私が逃げるのを逃し給はなかつた、益々眞面目に道を辿りました。

眞初めから私の考は先生に駁せられましたから、日夜煩惱せる數種の問題を悉く投げ棄てゝ、專ら信仰を得たい事ばかりに務めました、それが爲め却て甚しき苦痛を感ずる樣になりました、如何にしたらば眞の御惠みに接し得られるかと云ふ處まで考が進歩して來ましたから、やたらに御惠みを搜索しましたが、更に其光を見出す事が出來ませぬ、そこで種々樣々に自分勝手の工夫をして、或は妄想を以て御惠に接して見たり、或は眼を閉ぢて佛身を想像して御惠みを感想したり、所有方法を以て實驗して見たいと苛ちましたが、實驗か出來た樣で、何だか安心が出來ないものですから、是ではまだ駄目だと思ひまして、どうかして〳〵と云ふ念慮は益々烈しくなりまして、其實驗に苦しんだのであります。

十一月第一土曜例に依つて九段で近角先生の講話を聽聞して居りましたが、人生問題に就て色々懇篤なる御話が私の目下の境遇に誠に適切なる御意見でありまして、一々身に染みて有難ふございました、其講話の中でこう云ふ樣な事を申された樣に承りました、『現今の信仰に這入りた人々が我々は他力に依りて救はれるものゆへ、何をしても彼をしても更に構はぬと云ふて居るものがあるが、それでは眞の信仰といふ事は出來ぬ、眞の信仰を得るまでは總ての人生問題を捨てゝしまはねばならぬ、又一方では何をしてもいけない、彼をして

もいけないと云ふて居る人があるが、是又眞の信仰を得た人てない、既に信仰を得てからならば何をしようと彼をしようと敢て妨げないのである』と私は此時斯う承つた、先生前に人生の事は悉く捨てよと申されて、今又捨てるに及ばず悉く佛の慈悲より顯はれたものなりと、前に非を說かれ、後に是と認めらる、何と矛盾した事ではないかと、私は更に疑問を生し、其解釋に苦しみ、是非善惡の判斷が出來ませぬ、是と思へば非なりと、非と思へば是なりと破せらる、私は最早根盡き氣弱り、力なくして進んで信仰を求めるの勇氣がない樣になりました、嗚呼自分は此近角先生の講話の意義でさへ了解する事の出來ない、眞に半文の價値なきもの、此世に處するも實に耻かしく、死して地獄に墮つる外術なき事と自分を見限り思ひつめて、とうとう泣き出しました、此刹那夫故に我汝を愍みて本願を成就す憂る勿れ

と　佛樣が現に私の爲に顯れて呼掛け給ふた樣な云ふべからざる一種異樣の感に接しました、私は此慈悲の御呼聲に愚痴の私が氣付かせて頂きました時は何とも彼とも申して見樣がありません、踊り上る程億しくありまして、悲みは喜びの涙となりたのです、今日迄信仰を得んと苦悶したる無明の闇は一點認めたる慈悲の光明に照されて、身神共に安らかになりました、そこで十劫正覺の初より私一人を呼掛け給ふた此御呼聲を今迄氣付かなんだとは全く私の計ひ心を以て、どうしたら御惠みに接し得るかとうしたら實見が出來るかと思ひ惱んだ爲めてあります。此遣瀨ない大悲の御呼聲を聽きなから人生問題を解決せん爲めに信仰を求めたいと思つたり、極樂に參りたいために念佛したいと思ふて居ました、私の心は皆間違て居りました、愈此御慈悲の程か分て見れば、御慈悲に接したいとか、光明を認めたいとか、御救ひを實驗したいとか思ふて居た事から、信仰を得たいと思ふて居た心までが、悉く私のはからひでありましたと、唯懺悔を致すばかりです、兼て先生の講話に御慈悲に氣の付くとは實にこゝの處であつたかと有難く〳〵なつたのです、平日ならば講話を聽いて居る間は有難くありますが、其席を退くなり心は散亂して一片の念佛さへ出ないのですが、此日は終日有難念佛して喜はせて頂きました。

私が此時の喜びはほぼこんなものであらうと思ひます、私に今年三ツになる小兒がありますから、ふとこんな喩へに氣付きました、三四才の小兒が外で遊んで居たら、一匹の犬が來ましたから、小兒は驚いて急いで內に這入りました、內のものは一人も見へないから、「カアチャン〳〵」と座敷から部屋から臺所から便所まで索しました、けれども索し出しませんものですからとう〳〵泣き出しました、小兒の泣き聲を聞いた母親は物干から小兒の名を呼びつゝ降りて、來て小兒を抱きながら、何も恐ろしい事はないよ、「カアチャン」か居るのだからと慰めつゝ乳を飲ませました、小兒は母に抱かれ乳を飲みながら、笑ひ且つコウ〳〵と犬の方を眺めて喜んで居りました、私が人生問題を解決せん爲めに佛樣を索しましたのは、小兒が恐ろしさのあまり母親を索した樣なもので、愈御慈悲に氣付かせて頂いて見れば、丁度小兒が母親に抱かれながら、恐じくて逃げて來た犬が可愛らしくなつた樣に、人

生の事何も彼も恐ろしき事なく、苦しむものなく煩悶する事のない樣になつたのです。

私は前には人生問題の爲に信仰を求めましたが、後には信仰を得んために人生問題を堵しました、既に信仰を得れば此迄日夜苦悶せる人生問題悉く解決せられて一擧手一投足佛の御はからひでないものはない、既に佛に據れる身なれば成敗浮沈更に意に介せないので、進退去就なるがままに任せるのであります、なるがままとは即ち佛樣の御はからひなりと、御恩を喜んで居ります。

永い間手造りの信心で無理に安心して居た僞信仰で怪しき日暮しをして居た私が、眞の御慈悲に氣付かせて頂いたのは、佛樣の深き〳〵御手廻しに預つかつた事を感謝して居ります。若し私の家庭が圓滿であつたなら、到底今日の樂しき生活を續ける事は出來ぬであらう、此家庭問題は父の病氣弟の死去が原因となつたのであります、父若し健全であつたなら再び支那に渡り、弟若し死去せなかつたなら益々御慈悲に遠かりて、屹度後悔する時期があつたのでありませう、能く〳〵考へて見ますれば、家庭の不和、父の病氣、弟の死去、どれも皆此信仰を私に得させん爲めの御方便であつた事を感謝せずには居られませぬ、私は人生の苦悶を去つて頂いた丈けで十二分の滿足を以て御慈悲の程を感泣して居りますのに、未來は地獄の苦みを御救ひ下され其上御淨土に參らせて頂くと承りて見れば、最早どうしたら好いかこうしたら惡いだろうとか更に自分で惱む餘地がないのです、唯念佛を稱へて御慈悲の廣大なる事を感謝するより外ないと思ひます。

私が眞の御惠みに氣付くまては、信者らしく念佛申さんと思ふても中々稱へられなかつたのが、其後は何時の間にか思はず稱へさせて頂くので、或場合には遠慮すべき處と思ひ居なから、つい御稱名が顯れ下さるので益々心に喜ばせて頂くのであります。

私は眞の信仰を得れば煩惱は自然に薄らぐと承つて居ましたが、さて私はどうもまだ薄らいだ心持になりませぬ、やはり以前の如く腹を立て愚痴をこぼして居ります、併しそれては如何と案じる樣な事は更にありませぬ、私は人よりも一層罪の深きものですが、又人よりも一層幸福なものであると御慈悲の程を益々喜んで居ります、此味ひはどうも以前になかつた樣に思ひます、以前なれば朝腹を立てると短くて其日の午後長ければ三日位は回復が出來なかつたので、益々家庭が濁つて參りましたが、此頃は長くて二三時間に縮まりました、是が御慈悲の御蔭と有難う喜んで居ります。

私はどうも人の樣に喜びの心が起りませぬに付け、私の仕合なる事を喜んで居ります、私が其後實際經驗した喜びは煩惱の中でも私は愚悲が最も著しい樣で、些細の事に怒るのです(主に家內に於て)此れが私の癖ですが御慈悲に氣付せて頂いてからは、以前と少し態度が變つて來た樣です、少しく怒つた時は其丈の喜びが增し、烈しく怒つた時には喜の度が其れに比例するので、最もひどく怒つた時などは、直に對手の前にて御念佛が顯はれ下さつて感謝の涙にむせぶのであります。

罪障功德の體となる氷と水の如くにて氷多きに水多し障多きに德多し

誠に有難い事てございます　　南無阿彌陀佛

講義

歎異鈔

近角常觀

第十二章

故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありて、そしるにて佛說まことなりけりとしられさふらふ、しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり、あやまてそしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ、かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、佛のかねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじとときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。

信仰の眼中には唯佛樣と自分があるばかりて、他の善惡は更に無關係である、否善惡ともに自分の信心を增長さして下さる御緣てある、しかるに世間の見解ては人生の事を御互の間て解決せんとするのてある、夫故研究やら論議、問答やら諍論誹謗やらが起るのてある。しかるに一たび佛を信じつる上は如何なる誹謗や非難を向けらるゝも何等の痛痒を感ぜざるのみならず、夫が御緣となりて、ます〳〵信を增長するのてある、即ち佛既に謗法の人あることを說きたまふ已上は果して佛說の通り事實謗法の人があるわいと、益、佛語に虛妄なきこと今更の如く面り見ることが出來る、しかれば佛說の如く、往生一定と益々決定すべきてある。萬一にも一人も謗法の人なくんば佛謗法の人ありと說きたまふに事實上其人はなきかと怪しまねばならぬ、是恰も第九章に「これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ、踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには煩惱のなきやらんとあやしくさふらひなまし」と仰せられると同樣である、喜心のなきにつけ、いそぎまいりたき心のなきにつけ、そしる人のあるにつけ、往生は一定と決定するのてある。かく言へばとて人に謗らるゝのがよいといふ意味ではない、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられし如く、佛のかねて信謗ともにあるべき旨をしろしめして我等が疑なき樣に說きおきて下されたなれば、佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや、と何につけても眼につくものは本願なり、大悲なり、信仰と修養との區別は最後本願に安んずるか、人生に眼をつけるかの點てある、佛は功けて下さるは難有いが、どうも喜ばれぬとか喜ばれるとか、往生は一定に違いがないが出來るものならば論をやめたいとか、往生は一定に違いがないが出來るものならば論をやめたいとか、往生は一定に違いがないが出來るものならば論をやめたいとか、往生は一定に違いがないが出來るものならば論をやめたいとか、善にせよ惡にせよ氣に掛けるは、はからひてある、信仰は我往生の一大事てある、人が謗るにつけても益々佛語に虛妄なきことを面り見せて貰ふたといふて喜ぶべきてある、流罪てあろうが、迫害てあろうが、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさと本願にてまします已上は謗る人自身すらも結局夫が因緣となりて此大悲の惠を蒙るに違ひない、唯信鈔に信謗ともに因としてみなまさに淨土にむまるべしといひ、敎行信證後序に信順爲因、疑謗爲緣と仰せられたも皆此大悲を仰がれたのてある、かく言へばとて、決して人に謗られとて企つるのではない、たとひ謗る人ても空しくしたまはぬが大悲大願の御惠てある、唯々不思議といふの外はない。

餘事に涉るやうなれど、大悲大願の御はからひを仰ぐのと、自分のはからひを挿むと、少しのことて寸毫の差千里の別を生ずる次第てある、たとひ親鸞の名字を惡しと思ふて聖敎を山野にすつるとも之を觸るゝ有情群情蠢々の輩其益を得べしと仰せられ、また出家として肉味を貪すること無慚無愧の甚しきなり、せめては三世諸佛解脫憧相の袈裟をかけながら之を食したならば佛緣を得るならんと仰せられたは、何れも皆佛の御惠を仰がれたのてある、しかるに若し之を誤て、虫や魚を救ふためにとて事更に色々の企をしたならば夫こそ雜行雜修てある、親鸞は父母孝養の爲にとて念佛一遍にだもまふしたることといまだ候はずと仰せられた聖人が一點自分の力を挿まるゝ筈はない、親鸞は何の價値もなきもの、若し親鸞を惡むの餘、之を山野にすつることありとするも本尊聖敎は如來の流通物なれば御救ひ下さると御惠を仰がれたのてある、夫を誤りて事更に山野にすて人とはからひ企てたならば大間違てある、同樣に若し誤て人に謗られんと待設くならば大間違てある、人が謗るにつけても佛說まことなりけりと仰ぐことを仰せられたのてある、

いまの世には學問して、ひとのそしりをやめんひとへに論議問答をむねとせんとかまへくれさふらふにや學問せば、いよ〳〵如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんどゝあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもときかせられさふらはゞこそ學生の甲斐にてもさふらはめ、たま〳〵なにこゞろもなく、本願に相應して念佛するひとをも學問してこそなんどゝいひおどさるゝこと法の魔障なり、佛の怨敵なり、みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす、つゝしんておそるべし、先師の御こゝろにそむくことを、かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを

當時餘程學者風のきゝわけ、しりわけて論議問答をする弊があつたものと見へて、實に思ひきつて戒められたのてある、此章に對する證文が即第二章の、しかるに念佛より外に往生の道をも存知し、また法門等をもしりたるらんと心に〳〵おほしめしおはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなり云々是てある故に學問は少しもいらぬ、しかし學問をしてならぬといふてはない、學問せばいよ〳〵如來の本願の御本意を明らかにし悲願の廣大の旨をよく〳〵胸におちつける爲てある、

大谷大學圖書館 昭和七年十月 22466

此に注意すべき如來の御本意とか、悲願の廣大のむねといふ殊に重々しく際だちたる御言を例の如く言葉すべりをして當りまへのことゝ輕々しく讀み去りてはならぬ、第三章に此條一旦そのいはれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけりと云ひ、第九章にこれにつけてこそ愈々大悲大願はたのもしく云々なども同樣である、本願の御本意は特に五濁惡時のわれらをたすけるために起したまひたのである、悲願の廣大なることは大小の聖人、輕重の惡人皆悉く助けたまふ大海である、淸淨なるものを助ける願は他にもあり、善人の成佛する法は多し、しかるに汚穢極惡の我等を特にたすけんが爲に選擇したまひし本願である。學問せば物しりになる爲てはない、能く此本願の御本意、悲願の廣大なることを信知して、他の人が我如き賤しきもの、愚かなるもの、穢れたるもの、惡しきものは往生はいかゞなんどゝあやぶまん人に對して、本願には善惡淨穢の區別はない寧ろ其汚穢下賤の凡愚を救はんといふか選擇本願の御本意であるぞと說ききかしてこそ學問した甲斐もあるといふものである。併これは文字では讀む學問ではない、御慈悲で心に頂いた活きた學問である。聖德太子讃に曰く、久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり、他の法然聖人の御弟子は文字で選擇集を讀まれたるゆへ、學問的に合點せられたものゆへ、自分が貧窮困乏、愚痴無智、破戒無戒とは我身也とは頂かれなんだ、しかるに親鸞聖人は聖德太子の御導の下に愛慾の廣海に沈み、名利の大山に迷へる垢穢凡俗の愚禿一人の爲の御本願と頂かれた、全體眞は此活き信心の外に學問があるべき筈はない、しかるに宗學なる學問が別立する樣に考へらるゝに至つたは大なる間違である、信の一つが活きて居れば本願の眞意を說ききかせ得る學問が、信が一つなきために全く論議問答物知りの道具となり、たま〳〵信をいたゞきて本願の仰せ通り、愚鈍無智の儘で何心もなく大悲を仰て念佛する人に對して、譯を知りて居るか、學問せねばならぬなどゝ言ひおどすといふは言語道斷である。此に至りて數異鈔の百尺竿頭一歩を進むる筆鋒を以て「法の魔障なり、佛の怨敵なり、みづから他力の信心かくるのみならずあやまて他をさまはさんとす、つゝしんでおそるべし先師の御こゝろにそむくことを、かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを」と戒められた、是れ求道者の學問に對する態度を御示し下された、實に現代の如き學問萬能を信ずる社會に對して剴切骨を刺す御誡である。かく言へばとて決して學問を斥け、疎かにせよとにはあらず、信を得るには學問も何もいらぬ、されど信を得れば學問が妨となるとは云はぬ、學問せばいよ〳〵本願の眞意を明らかにせよとの仰せてある、必しも學あるがゆへに邪魔とならず、學なきがゆへに害ともならず、要は信があるかなきかてある、一代經を五遍讀まれたる法然聖人が選擇集には三經道綽、善導の外に引用したまはぬ、夫を授かりたまへる親鸞聖人は敎行信證に一代經を縱橫無盡に引用したまひた、其顯淨土眞實敎行信證とは此章の初に仰せられし如く他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は本願を信じ、念佛をまふさば佛になるといふことてある。念佛成佛是眞宗の外はない、蓮如上人は御文に一切の聖敎といふも、たゞ南無阿彌陀佛の六字を信ぜしめんがためなりといふこゝろなりとおもふべきものなりと仰せられた。

◎愚禿親鸞

須藤光暉氏著

本書は小說家として聞いて居る須藤南翠氏が、後半生の心血を我國敎祖傳の篇述に注ぐ決心で、先づ其の第一編として公にせられたものである。傳記と言つても嚴密なる意味にて聖人一代の史實を後世に明かにする目的で書かれたものでも無く、又純信仰的の意味にて讃嘆仰の至情を此の一篇に托せられたといふ風のものでも無い。最も通俗的に今迄聖人に就きて何等の知識なき婦女子でも一讀愛讀として聖人の崇高なる人格、一代の御苦勞が會得出來るやう著者一流の採筆を以て面白く小說的に、從來世に傳はつてる事實を記述せられたるものである。從て未だ聖人に就き何も知らぬ社會に聖人の偉大なる一代を知らしむる上に於ては確に効果有るを疑はぬのである。乍更其の小說的で有る丈け、夫丈け連絡なき事實に無理に連絡を着けて興趣を持たせてある點なども間々散見するのである。此點は本書を見る人の爲に特に注意をして置くのである又夫丈け純信仰の眼からは物足らぬ點あるも已むを得ぬ。製本の意匠に至つては實に近來の意を用ゐたもので、卷頭に聖人直筆の原色版寫眞版を初め、本派本願寺御法主の扁額大の題字や、大谷派御法主の有名なる「勿體なやこの御句の短冊などさながら肉筆の如く鮮かに刷られてある。殊に專修寺秘藏の御繪傳の卷物の寫眞版に亞りては實に得難き珍品である。又中澤畫伯揮毫の數葉の油繪など何れも推奬に價するのである又卷末に聖人一代の年表の添へてあるのも便利である。兎に角吾人は斯くの如き書籍の出版を見るにつけても、如何に現時聖人の敎化が一般に及びつゝあるかを思ふて感謝に堪えぬのである。《定價壹圓五拾錢發行所麴町金尾文淵堂》

◎花つみ日記

文學博士　姉崎正治氏著

著者が再度の洋行に於て齎らし歸られし土產である。「玉ならでつみにし花を家づとに、すきにし野邊のかたり草にせん」とは本書を公にせられし著者の深き志である、本書の主なる部分たる「花つみ日記」は伊太利亞の旅行記にして澄み渡りたる青空、シプレスの木立、畫の樣な山水、雅趣に富める建築を初めとして中世已來の歷史を語る寺院、繪畫、古蹟、競場、恰も著者に導かれて歷々旅行するの感がある、全體旅行記といふものは其地を踐まぬものには了解し難く、趣味少きに關はらず、本書は此困難に打勝て卷を繙く每に之を捨つる能はざらしむるは全く明快流暢なる筆致と高雅淸婉なる趣味の橫溢せるが爲にして恐くは旅行記として最も成功せるものであろう、本書に於て最も異彩とすべきは、著者聖者フランシスに對する熱誠なる憧憬の發現である隨て繪畫の如きも聖者を渴仰して其心血を注げるジオットー、及アンジエリコの筆に止め親切に其寫眞板を多數に挿入されてある、殊に著者に感謝すべきは聖者の故鄕アッシシに詣で詳かに其實蹟を示し、疑惑を披瀝して、聖者の偉大なる事跡は其淸、貧、順、なる信念に淵源することを紹介されたることである、現時泰西の慈惠事業を云々するものが其信念に基づけるを悟らず、信念に氣付きても遠く、中世の修道院に根ざせるを悟らず又信念につきても舊敎の堅固なることを着眼せずに居るは大なる間違である、此點に於ては著者が思想の變遷に隨て、時流に先ちて泰西の眞相を紹介せらるゝに敬服する次第である。猶「われやいづこの記」は初度洋行の時の伊太利亞旅行記である、又「パリからロンドンへ」「原くさ日記」は再度洋行の日記にして後者はスコットランドの旅行記である湖光明媚なる高原の景色、淳樸忠實なるスコット人の家庭淡しきの限である《博文館發兌四六版五百八十三頁、定價壹圓參拾錢》

時報

臘月思海

第一高等學校德風會は求道學舍に於て高等師範學校佛教青年會は同校内有朋館に於て、何れも毎週歎異鈔の講義ありて、眞摯の態度を以て求道せられ敬信法悦の人多し。大森善友會は敬虔なる婦人聞法の集會にして、本月十五日の會の如きは、午後一時より開會し、會後團欒求法の餘、篤信者の主催にて有志の人々夜十時まで法味愛樂せり。本年歳末に近づきて著しくあらはれ來れる現象は、人生問題の上より信仰を求むるの氣風熱烈なることなり。蓋し四五年前に於ける信仰問題の再燃したるかの感あり。されど前の時は多くは主觀眞想の傾向を取りしが、近時は實際現實の人生につきて眞光明を摸索せんとするものゝ如し。是亦大聖善巧の矜哀によりて眞心を開闡せしめたまふ大悲の御惠たらざるはなし。世上の風波に激動されたる思想海の潮は緩急樣々なりと雖も、何れも終には大願海の中に入りぬれば、智慧の潮、功德の波に一味にして、自然に涅槃の彼岸に到るなり。顧みれば學舍を開きてより將に八年の歳を終らんとす。此間に於ける幾多の出來事を回顧すれば、人生の變遷洵に驚くに堪へたるものあり。殊に本年は西川唯信居士、菅瀨妙貞禪尼の淨土に還歸したまへるあり。夢か、眞か、果た幻か、此の如きの間如來大悲の眞光明こそ我等を護持養育したまひて、如來の眞子として結びつけられ、重愛を蒙ること如何なる不可思議の宿緣ぞや。あはれ生死の藭繁り、煩惱の林深きが中に、慈父悲母と共に遊戯して、我等、求道の同朋を引導し、人生を恭嚴し、普賢の德を修したまはんことを。つゝしみて如來本願力の回向に遇ひたてまつる恩德を感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

求道會館設立喜捨金受領報告（第四十二回）

一金壹圓也　東京宇佐美榮太郎殿
一金壹百圓也　東京西川眞吉殿
一金貳圓也　東京岩永法電殿
一金壹圓也　山形會田重二郎殿
一金五拾錢也　山形岡田彌作殿
一金五圓也　東京生沼きく子殿
一金壹圓也　大森今田眞子殿
一金壹圓也　大阪爲貴七覺殿
一金壹圓也　東京神谷庄之助殿
一金參圓也　東京小澤一殿

小計金百拾五圓五拾錢也

通計參千參百四拾六圓五拾四錢也

右御寄附を忝うし難有く奉存候茲に謹みて奉感謝候也

本願寺派本願寺御法主大谷光瑞上人御題辭
大谷派本願寺御法主大谷光演上人御題句

教祖傳記叢書

文學博士 前田慧雲師題詩
文學博士 南條文雄師序文
佐々木月樵師跋
中澤弘光氏畫
須藤光暉氏著
結城素明氏裝釘

佛教界空前の美本

光瑞上人の「宣揚勝業」の四大字は書幾紙に印刷して大額面用に供す
光演上人の「勿體なや祖師は紙衣の九十年」といふ俳句は雲形短冊に印刷して掛軸又は篇額用に供したり

鳥子紙色摺
聖人御眞筆金文字入
裝釘頗美麗箱入
全編總平かな附
金壹圓五拾錢
郵・稅金拾貳錢

聖人六百五十年
御遠忌紀念出版

發兌元

●卷頭親鸞聖人御親筆御和讃（鳥子紙木版色摺）●聖人手澤笈及眞蹟●國寶御傳繪横卷六圖●東西大谷御廟●眞宗各本山六圖●上太子と六角堂（以上寫眞版アートペーパー色摺）
●中澤弘光畫伯苦心の聖人新御傳繪八圖（三色版光澤紙摺）
●卷末覺如上人御傳抄及親鸞聖人年表

親鸞聖人は、我佛教界の有する唯一無二の偉人なり。擧世の僧俗名利の巷に彷徨し、自力難行に勞れて一人の出離の要津を覓むものなきに際し、斷然僧綱を抛ちて絶待他力の門を開き、自から妻帶肉食の戒を破し、身を以て在家往生の範を示したるが如きは、末法濁世の時に於て最も適切なる教化にして、其の勇斷果決、實に驚嘆に餘れり。且つ自ら謙して非僧非俗愚禿親鸞といふ、其法德渾然として玉の如し。宜なる哉、滅後六百四十八年の今日二萬の末寺と五百萬の信徒とを有して、愼重に案を立て、餘力滿韓各地に及び將に東洋の一大宗教たらんとするや、著者深く茲に感ずる所あり、湮滅せる事蹟を探りて、愼重に案を立て、行るに平易流暢なる文をつ
てし新たに『愚禿親鸞』の一卷を提供したり。加ふるに兩本山法主現下東西の畫宿毫を染めて卷頭を飾り、洋畫壇上第一の名手、妙技と信念とを以て繪相を描き、幾多の眞蹟、幾多の寫景、錦上花を飾り、以て近來出色の美本となれり。希くば信徒と否とを問はず試に一本を購ひて其の書架を美にせられんことを

明治に生れたる
新御傳繪抄

東京市麴町區平河町五丁目五番地　振替貯金口座東京三八一七

金尾文淵堂

宣宗大
導教授
佐々木
月樵著

親鸞聖人傳

菊版大册八百頁
親蹟及傳繪木版挿入
定價 金貳圓五十錢
郵税 金十二錢
目下印刷中

敎化の現代に瀰漫して、然かもその人格及び傳記の、漠然として捕捉しがたきは我親鸞聖人傳也、御在世の昔、弟子順信「下野緣記」を記し、顯智また「本傳を草す。聖人滅後三十四年にして覺如師の「御傳鈔」出つ。爾來、之によりて聖人を讃仰し或はまた內外の典籍をも參照して之に關するの研究は相繼で今日に及べり。そのうち、高田派に五天良空あり、佛光寺派に素雲善養あり、本願寺派に玄智景耀あり、大谷派に先啓了雅あり。何れも皆な生涯をその研究に捧げて、然も滅後六白四十餘年の今日、今も尙ほ聖人の人格と傳記とは依然として曖昧のうちにあり。之が爲めに、著者は多年心をその研鑽に潛めつゝ、常に確實なる傳紀と敎義との合糅的研究によりて聖人の人格を顯彰し、以てその傳紀の完成に勉めたり。その草稿の明治三十七年正月已來每號「精神界」誌上にかゝげられて今日既に六十二回滿六年間に亘るも未た完結に至らず。然も著者の研究は日に月にその歩を進めて、前揭の既成稿のまた不備なることを感ずるに至りぬ。是によりて、玆に再び初めよりその稿を新たにし、く聖人傳全部の完成を告くるに至れり。本書は著者が古今眞宗各派の諸傳を研究統合し、すべての歸結は多く之を當時の世錄、諸家の日記等に徵し、或時は實地にその遺跡を踏査し、或時は、寒夜草庵に當年の昔を偲びつゝ常に聖人の照覽を仰ぎて、謹み〳〵筆を遺りたるもの也。　親鸞聖人傳出づ。敢て我同朋に告ぐ。

二月廿日限り特價金二圓　小包料十六錢　◎二月十日より着金順に發送

最新刊

多田鼎著

歎異鈔講話

クロース綴美本　金四十五錢　郵税六錢

歎異鈔は親鸞聖人の他力信仰の絕對的表示たるは人のよく知れる處、本書は著者が多年本鈔を讀破して其の微細幽玄の歸趣を、謹嚴の筆と白熱の信眼とを以て縱橫に解釋したるものにして、その特色とする所は、一々文句を逐はず、全く本鈔の紙脊に流るゝ意趣そのものを示したるにあり、されば本書は、歎異鈔の「文々句々の意」は如何なるかを講義したるにあらで、歎異鈔の「結歸する眞髓」は如何なるかを開顯したるもの也。讀者はこの異彩の字によりて信仰の絕對意に觸るゝを得べし。

發行所　東京振替巢鴨東京　三一二一三　五二二一　無我山房

信仰入門

目宗は某師教的同の朋誘下に以より、五冊を拔萃印刷が傳道有志諸君に本郷東京區森川町六番地一也。

東京市麻布區本郷町六番地一　振替口座東京一六九六

求道發行所

唯信鈔文意

信仰問答

初版（用本施）定價七錢　新版（用本施）定價五錢

頭註歎異鈔

第四版（用本施）定價四錢

人生と信仰

第一版（用本施）定價五錢

親鸞聖人の信仰

第二版　郵税貳錢　定價四拾錢

近角常觀著作書目

第一百號紀念

六條學報

二月一日發行

眞宗に於ける觀心　鈴木法琛
大灌頂光眞言　島地大等
弘法大師の天台觀　廣橋連城
天台の淨土十疑論に就て　妻木直良
支那に學びし韓の僧　脇谷福謙
支那佛教々會史論　清原秀惠
禪より見たる華嚴　湯次了榮
淨土宗分裂を教義的理由　杉柴朗
南地三論の教系を論ず　三井淳辨
台密と東密　中西智勇

●菩提樹下の宣言（智圓）聯合大學論（衆甫）●注目すべき現時の宗教運動（湖畔）●傳道の第一義（無方）●眞我擴展の見得（錫東）●宗學の現在及び將來（幻堂）●宗教の現實化を論ず（老呆）●宗教と新聞（翠溪）●眞言

予が彌陀觀……蘆津實全
米國に於ける最近の宗教運動……松本文三郎
宗教家事業の變遷……谷本富
布教私考……赤松連城
印度古代の大禮より見たる婦人の地位……高楠順次郎
起信論の淨土勸歸の段と易行品との比較……前田慧雲
愚禿の眞意義……藤田宗惠

宗の時徵（玄雄）●五性各別（圓妙）●監獄教誨論（南軒）●芳涯五則（逸碁）●百號回顧談（衆甫）●學報創刊記（白巖）學報發辱託（白巖）其他數項

支那の倫理主義に就て　朝倉曉瑞
我國民傳說と印度思想　阪倉若水
日本淨土教史料　鈴木暢幸
宗教の本質的二方面　清水友次郎
彌天道安の皐率願生　山內晉鄕
山家山外の事理總別　豐原龍淵
宗學の歷史的躰系的研究　四谷順誓
性均語錄　高木櫪堂
十王經と十王圖　禿氏祐祥
波斯匿王　濱口惠璋

發行所　京都　佛教大學壬寅會

前田博士題字
近角常觀序
泉文學士叙傳
故菅瀨夫人日誌

よろこびの跡

紙紙二百餘頁
定價廿錢
郵稅二錢
十部以上割引

右は本誌前々號及前號の告白欄に其一部を掲載せる故菅瀨令夫人の日誌全部を輯錄して、今回紀念の爲め印刷發行、知人間に配分せられたる者に候。猶ほ殘部有之候に付、有志の諸君は御申込相成り度く、最も夫人の日誌が飾るなく、僞るなく信仰より來る實生活其儘の告白なる事は、既に本誌にて御承知の通りに候。若し全體を通讀せられ候はゞ如何ばかり有難き事ならんと存候。右謹告候也

發行所　東京市本郷區東片町一三八　同和學園
申込所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回一日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十二年十二月十二日印刷
明治四十二年十二月十五日發行
發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）
東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎罪と惠　自督

◎知恩報德

◎聖人追慕

講話

◎如來は無上法皇なり　近角常觀

聖傳

◎デヤータカ釋尊傳　第卅五　出し拔かれし酷き鵠

告白

◎故菅瀨夫人の日記

紹介

◎佛教辭典

時報

◎山形行◎求道學舍報恩講◎東京諸會合

求道第六卷第十一號　明治四十年十二月十二日第三種郵便物認可　明治四十二年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京市御田區英土代町二ノ一三光堂印刷